

2026-2027

レフェリー指導 ハンドブック



公益財団法人日本ハンドボール協会

競技・審判本部

目次

審判員の倫理要綱	1
審判員の指導体制の確立へ向けて	2
審判員の実技指導の手順	4
レフェリーアセッサーの資質と任務	6
A・B級審査会の評価の要点について	12
レフェリー評価票	14
レフェリー評価における着眼点	16
レフェリー評価票の記入方法	17
レフェリー評価票用「審判指導チェックシート」	19
レフェリーアセスメントシート	21
レフェリーアセスメントシート着眼点	23
レフェリーアセスメントシート記入例	24
試合分析記入例	25
レフェリーアセスメント用「アセスメントチェックシート」	26
令和8年度（2026）審判員の目標	28
令和8年度（2026）各級公認審判員の目標	29
令和8年度（2026）A級審判員の目標	31
令和8年度（2026）B級審判員の目標	33
B級審判員チェックリスト	35
令和8年度（2026）C級審判員の目標	37
C級審判員チェックリスト	39
令和8年度（2026）D級審判員の目標	41
D級審判員チェックリスト	43
公認審判員および公認テクニカルオフィシャル、公認審判指導員等に関する規程	45

審判員の倫理綱領

レフェリングは、競技中の判定はもとより、ハンドボール競技の進歩・発展に寄与するものであり、レフェリーは責任の重大性を認識し、ハンドボール競技への情熱を基に、すべての人に奉仕するものである。

1. レフェリーは生涯学習の精神を持ち、常にハンドボール競技の正しい理解とレフェリング技術の習得に努めるとともに、その進歩・発展に尽くす。
2. レフェリーは任務の尊厳と責任を自覚し、教養を深め、人格を磨くよう心掛ける。
3. レフェリーはプレーヤーや監督の人格を尊重し、あたたかい心で接するとともに、レフェリング内容について理解と信頼を得るように努める。
4. レフェリーは互いに尊敬し、ハンドボール競技関係者と協力してレフェリングに最善を尽くす。
5. レフェリーはレフェリングの公平性を重んじ、レフェリングを通じてハンドボール界の発展に尽くすとともに、競技規則・諸規程の遵守および秩序の形成に努める。
6. レフェリーはレフェリング活動にあたって、営利を目的としない。

(公財)日本ハンドボール協会 審判本部

審判員への指導体制の確立へ向けて

(公財)日本ハンドボール協会
競技・審判本部

日本国内における審判員への指導及び助言について、その体制を確立したい。

指導・助言体制に関し、(公財)日本ハンドボール協会競技・審判本部では、その担当を担う者について下記の役割を位置づけている。

- ◆インストラクター(主に研修会での講師にあたる)
- ◆アセッサー(主に大会における審判員への指導・助言及び評価にあたる)

1. 審判員への指導を行う者(有資格制である)

- 審判本部合同委員会メンバー及びサポートスタッフ(審判本部組織図参照)
 - 都道府県(支部)審判長
 - 各カテゴリーの審判長(ブロック、都道府県)
 - 各大会審判長・副審判長
 - 各大会マッチオフィシャル(MO)
 - 公認審判員指導員
- ※公認審判員として登録されているもの

2. 指導の実際

レフェリー指導ハンドブック

「審判実技指導の手順」に沿って指導及び評価にあたる

3. 指導のための教材及び資料

- 「レフェリー指導ハンドブック」「テクニカルオフィシャル MO/TD 競技ハンドブック」
「Handball Referee スタートブック」
- 競技規則書及び通達
- 年度目標
- 各級公認審判員の目標
- チェックリスト
- 全日本大会担当審判員候補者研修会資料
- 競技規則問題集

上記資料を使用し指導及び講習会にあたる。

4. 指導場面

1) 各都道府県・連盟における研修会

○インストラクター

- ・プレゼンテーション指導（審判員の目標、各級公認審判員の目標 など）

2) 各大会における審判会議・ミーティング

○インストラクター

- ・プレゼンテーション指導（大会中や各日の目標、目標に対しての評価 など）

3) 各大会における試合の後

○アセッサー

- ・ゲーム観察、分析、評価、指導（各級公認審判員の目標とチェックシートを活用）

参考：

審判員の条件

- ・人間性
- ・競技規則の理解と運用
- ・技術（判定の能力、ポジショニング）
- ・アスリートとしての体力（フィジカル）これらの観点から指導を行うことが大切である。

資格に基づいた正しい指導を！

目標

「学ぶことを止めたなら、教えることを辞めなければならない」

審判員の実技指導の手順

(公財)日本ハンドボール協会
競技・審判本部

審判員が可能性を最大限に発揮し更に向上してくれることを願い、全国にて統一した実技指導を目指し、以下の手順を参考に実技指導を行う。

また、本ハンドブック内「レフェリーアセッサの資質と任務」を事前に確認しておくこと。

◆試合前

- ①指導担当審判員のもと(審判控室等)を訪れる。決して呼びつけたりはしないこと。
- ②審判員に対して審判員個々に応じた各級の審判員の目標や年度の審判員の目標を確認してから、試合にのぞむことを伝える。各級(B~D)のチェックリストを手渡す。

参考:

・日本選手権、リーグH	A 級審判員の目標、年度の審判員の目標
・全国大会	B 級審判員の目標、年度の審判員の目標
・ブロック大会(支部大会)	C 級審判員の目標、年度の審判員の目標

- ③審判員各個人やペアにおいて課題を持って、試合にのぞむことを伝える。そして課題を聞く。
- ④評価表や審判指導用紙(ノート)などを用意し、アセッサ(審判員への指導・助言・評価者)自身も指導のための準備を整える。

◆試合中

審判指導チェックシート・アセスメントチェックシート等にチェックしながら観戦する。

◆試合後

- *最初に慰労する。
- *トラブルがあった場合でも決して試合直後に指摘しない。
- *更衣後など落ち着いた状態で反省会に入る。
- *関係者以外は反省会に入れない。
- *指導が長時間にならないように配慮する。(30分を超えないように)

- ①審判員(ペア)に試合を終えた感想を聞く。
- ②試合前の課題を聞く。

- ③試合前の課題に対してどうであったか聞く。
- ④試合での重要事項の確認。
7mT、失格、トラブルなど
特に疑問点はないかを聞くことは大切である
- ⑤ここまでの内容について、双方向からの意見を交換する。
審判員の分析とアセッサー（審判員への指導・助言・評価者）の分析の擦り合わせ
- ⑥審判上の指導を行う。（アドバイス・ヒントを与える）
各級の審判員の目標、各級（B～D）のチェックリスト、審判指導チェックシート・アセスメントチェックシート等を基に振り返る
評価票の記載事項順に指導
必ず良い点を指摘し励ます
重大事項の指導に関しては、よく確認した後に、はっきりと伝える
競技規則の適用違い（断定的）と、審判に関する判断（一般的）な場合とは、使い分ける
競技規則に記載された用語を使用する
最新の情報を取り入れた指導
私見を優先させたり、あいまいな表現をしたりせず、必ず根拠を示し説明する
- ⑦今後の課題を指摘する。
改善のヒントを与え、各級（B～D）のチェックリストを提出させ、良い審判員となるよう励まして終える

レフェリーアセッサーの資質と任務

豊富な経験と実務を積んだアセッサーによる評価は、レフェリーに貴重で積極的なアドバイスとなります。そのため、アセッサーは、確信を持った価値ある評価を提供できるよう努めなければなりません。また、アセッサーによる評価は、優秀なレフェリー育成・強化に活用されるだけでなく、特にブロック大会以上の場において、レフェリーが所属する都道府県協会との連動も必要となります。

■資質

- 1.レフェリーとして活動した経験。
- 2.「競技規則」の解釈と精神の正しい理解と十分な適用能力。
 - レフェリーとしてゲームを観察する能力。
 - レフェリーのパフォーマンスを客観的な視点で捉え、統一されたレベルに基づいて評価できる能力。
 - レフェリーのパフォーマンスの力量と質を正しく認識する能力。
(レフェリーが欠点を是正する上で実用的、専門的な助言となる)
 - レフェリーと共にゲームを分析し、実践的で技術的助言を与える能力。
 - 洗練された評価表を作成する。

■任務

- 1.少なくともスローオフの1時間前には会場に到着する。
- 2.競技規則、ノートと筆記用具を持参する。
 - スローオフ前にレフェリーに会い、簡単な激励をすることがレフェリーと良い関係を保つ要素になる。ただし、試合直前には、審判上の技術的な指示はしない。
 - ゲーム中、レフェリーのパフォーマンスについてノートを取り、試合後の分析と評価に活用する。
 - 励ましとなるレフェリーの良い点をアドバイスする。ただし、ハーフタイムはトラブル等が起こった場合以外行わない。
 - ゲーム終了後、レフェリーのパフォーマンスについて反省を持ち、分析をレフェリーにアドバイスを与える。

■はじめる前に

一般的にスポーツを指導する人のことを、「コーチ」と呼んでいます。コーチという語源は、元々、ハンガリー北部にあるコチ(kocsi)という町の名前に由来します。もともとコチは、初めてサスペンションを備えた大型四輪馬車が誕生した地として知られていました。この優れた機能を備えて走る馬車は コチ・セケール(kocsi szekér)、つまりコチの馬車と呼ばれ、人や物を輸送するために欠かすことのできない手段でした。馬車の役割(大切な人を、その人が望むところまで送り届ける)として使われていた「コチ」が語源となり、今ではスポーツの世界のみならず、教育現場やビジネス分野においても、コーチは、個人や組織の目標達成を支援する、大事なことを伝える存在として認識されています。

コーチが支援を行う際、その方法は、大きく分けると2つあります。

1つは、Teaching。そして、もう1つは、Coaching です。この2つの簡単な違いは、答えを「教える(ようにする)」

か、自分で見つけ出すよう「導いたり支援する」です。

Teaching で答えを持っているのは「教える側」であるのに対し、Coaching で答えを持っているのは、相手となる「受け手側自身」になります。

1. Teaching とは

Teaching では、上下の関係性を伴う「一方向」のコミュニケーションであるため、大人数に一度に指導することが可能であり、相手に方法や価値観の統一を、短時間で図ることが容易となります。

ただし、教える側への依存性が高くなる傾向にあり、モチベーションが下がりがちになってしまうこともあります。また、コーチとなる人物の知識や経験に左右されやすいため、受け手の個性が現れにくくなってしまう可能性もあります。

2. Coaching とは

Coaching では、答えを見つけ出せるよう導くために、お互いが対等な関係性の中で、「双方向」のコミュニケーションとなります。そのため、受け手となる方の構成を活かしつつ、相手の考える力や自主性の向上、可能性を引き出せるよう導くことから、受け手側は、自律することができ、モチベーションも上がる傾向にあります。

ただし、受け手側である相手が、答えを出すのを待つ時間がある程度は必要となります。また、双方向のコミュニケーションが必要であるため、一度に大勢の人に対しての実施は困難となります。

■ゲーム指導（観察と分析能力）

アセッサーがレフェリーの能力（ゲームコントロール等のパフォーマンス）を判断するためには、レフェリーのパフォーマンスを的確に観察し、分析する能力が必要になります。

アセッサーの試合観察と分析の方法には、大別して次の2通りの方法があります。

- 1.レフェリーのパフォーマンスを観察することによって良い点を伸張し、欠点を改善する分析を行い、アドバイス（教える）する。
- 2.レフェリーのパフォーマンスを観察し、評価するために分析をする。

① レフェリングの Teaching

一般的にアセッサーの任務はレフェリングスキルの上達を指導することが重要であり、そのためにはアセッサーのレフェリング分析能力の質が問われます。

レフェリーのパフォーマンスをうまく分析できたならば、倫理的な裏付けを持って指導を行います。スキルや経験の比較的浅いレフェリーには基本的な事項を「Teaching（教える）」することが重要であり、スキルや経験のあるレフェリーに対しては、試合を観戦している観客等を意識した発展的なパフォーマンス指導（プレイヤーマネジメント等）に変化すべきです。また、対象ゲームのみの指導といった短期的な指導の際には、これまでの課題とこれからの課題によって統一的な指導が行えるようにします。

特に注意しなければならないことは、十分なスキルを有していないレフェリーに対して基本的な事項も未完成であるにもかかわらず、発展的なパフォーマンスを指導する（教える）ことによって「絶対的に身につける必要があるレフェリングの基本的な事項」の指導がおろそかになることです。

※ 基本的な事項 → 「競技規則に関連した事項」「競技規則の精神」「位置取り」「走法」「笛の強弱・シグナル」「ファウルの見極め」「アドバンテージの解釈」「明らかな得点チャンスの解釈」等

② レフェリングの Coaching

一般的にアセッサーはレフェリングスキルを評価することが重要な任務であり、そのためにはアセッサーはレフェリーのパフォーマンスを分析し、正當に評価する能力が必要になります。

この能力は、レフェリーとして高度なレベルの試合体験をすることが基礎になります。つまり試合を観察し、分析するためにはプレーヤーが試合の中で行うパフォーマンス(ファウル・不正行為等)も高度にかつ巧妙に行われるものを見極める能力が重要になります。

アセッサーが行う指導は、限られた場所、時間内で有効的に行う必要があるため、Coaching にて指導します。つまりレフェリーのパフォーマンスの中で「ゲームを支配する出来事(鍵になる出来事)」に対して「簡潔に改善のヒント」を与える能力が重要です。

■レフェリーに対する評価手順(基準)

1. 試合前

- ①レフェリー控室を訪問し、レフェリーと顔を合わせて激励する。
- ②レフェリーは試合前の準備とコンディションの調整中であるので、無駄話を避け、少なくとも選手紹介の15分前には控室を出ること。
- ③コート全体が見渡せることはもちろんのこと、競技場全体が見渡せる位置を確保する(チーム関係者が近くにいない場所)。
- ④各種チェックシート(またはノート)等に試合中に起こった事項を記入し、ゲーム終了後のミーティングでの指導資料にする。

2. 試合中

- ①審判指導チェックシート・アセスメントチェックシートの活用
- ②レフェリーのゲームコントロール上の要点をメモする。
- ③ゲームコントロール、競技規則の適用面を重点的に注意して観戦する。
- ④レフェリーの長所と短所を記入し、欠点のみでなく、良い点も記入しておくこと。
- ⑤周囲に観戦者がいる場合には、言動に注意しなければならないが、特に重大事項等の場面で観戦者に同調するような表現は絶対に避ける。
- ⑥周囲の観戦者からその試合の場面等に関する質問があった場合は、応答しないのが原則であるが、答えるときは一般論として答える。

3. ハーフタイム

- ①よほどのことがない限り、レフェリーとの接触は持たない(控室が同じでも激励程度にしておく)。
- ②どうしてもアドバイスが必要な場合には、簡単に指摘したい部分のみを指導する。
- ③試合終了後のレフェリーへの指導のため、前半の指導上の要点をまとめておく。

4. 試合終了後

- ①最初に慰労する。
- ②トラブルがあった場合でも、決して試合直後に指摘しない。
- ③レフェリーが落ち着いた後（例えば更衣後）、ミーティングに入る。
- ④トラブルがあり、チーム関係者が質問に来た場合は、レフェリーから事情を聞き、対処する（その時は個人的感情を入れず、競技規則に則った説明をする）。

5. 試合の分析とゲーム終了後のミーティング

- ①関係者以外、ゲーム終了後のミーティングに入れない
- ②一般手順
 - a. レフェリー（ペア）に試合を終えた感想を聞く
 - b. 試合前に設定した課題について聞く
 - c. 課題に対してどうだったのかを聞く
 - d. 試合での重要事項（7mT、失格、トラブル等）の確認を行う
- ③レフェリーの分析とアセッサーの分析との擦り合わせを行う。
- ④レフェリングの指導を行う（アドバイス・ヒントを与える）。
- ⑤今後の課題と解決方法のヒントを与える。

[方法例]

- ①評価票・アセスメントシートの記載事項順に指導する。また、そのゲームで課題とした点を指摘し指導する。
- ②各級（B～D）のチェックリスト、審判指導チェックシート・アセスメントチェックシートを活用する。
- ③欠点のみを指摘するのではなく、まずは良い点を褒める。
- ④特に重大事項（7mT、失格、トラブル等）の指導に関しては、よく確認をした後に、はっきりと指摘する。併せて改善点も伝える。
- ⑤断定的に指摘する場合と一般的に指摘する場合を使い分ける。
 - ・ 断定的・・・競技規則の適用間違い 等
 - ・ 一般的・・・レフェリングの判断に関する事項ただし、ハンドボールの常識（Common Sense）に適合したものでなければならない。
- ⑥一つの場면을強調しすぎると、良い場面がなくなるので注意する。
- ⑦レフェリーの任務遂行について、バランスを考えて指導する。特に動きの面を強調しすぎることにより、判断が悪くなる傾向があるので注意すること。
- ⑧特にそのゲームでポイントとなった事象（良い点、悪い点）を指摘し、改善点を指摘するか、その処置が良かったことにより、以後のレフェリングがスムーズに運べたことを指摘し、激励する。
- ⑨最後に必ず今後の課題を指摘して、改善のヒントを与え、良いレフェリングができるように指導する。

6. 評価票・アセスメントシートの記入

アセッサーが注意すべきことは、報告を行うのは競技規則が正しく適用されたか否かについてであり、アセッサーが同様の状況で取ったであろう行動についてではない。

考慮されるべき点は、レフェリーがその瞬間に取っていたポジションから見たはずのものに対してであって、アセッサーがサイドライン、スタンドから見たものではない。

- ①試合直後に記載するのではなく、時間を置き、考える時間を取ってから評価する。
- ②試合の局面から評価を行い、最終的に全体のレフェリングの流れを考慮に入れて記入する。
- ③客観的事実によって評価する。
- ④特に重大事項以外で1～2回あったことによって、評価を大きく左右しない。
- ⑤試合を大きく決定するような判定ミスや処置を誤った場合は、大きく減点する。
- ⑥項目ごとに指摘や改善点のアドバイスを記入する。
- ⑦コメント欄には、指摘点のアドバイスのみならず、賞賛と激励が公平にバランスよく配置されるように記載する。
- ⑧記入が終われば、必ず記載事項を点検する。

■レフェリングの分析の方法と指導の観点

レフェリングの分析について大きな目的は、ストロングポイントのさらなる助長、そして課題を明確にして、レフェリーが「気づき」自らが改善点を引き出せるようにサポートします。さらには次の試合に向けて高いモチベーションになることが期待されます。

アセッサーには細かい点にこだわるのではなく、レフェリーの総合的なパフォーマンスにおける特徴や傾向の見極め、または試合の雰囲気や選手の温度、意図を感じられる観察力、そして必要な場面で求められる適切なマネジメントをアドバイスできる知識の深さなどが求められます。

1. 分析において考慮すべき点

①判定面

罰則を含めたスタンダードの確認。判定は公平で基準は一貫していたか。

②アドバンテージ

適格な適用と事後処理はできていたか。

③ポジショニング

特に重要な判断を求められた場面や判定にミスが見られたときのポジショニング、カウンターアタックに対してのスプリントが使われていたか

④監視すべき点

エリア際でのポジション争い、各種スローの位置、DFの距離の監視が確実に行われていたか。

⑤マネジメント

カードの出し方や選手に注意を与えるときに適切なコミュニケーションが取られているか。反則を繰り返す選手に気づき、予防に努めていたか。意義や不満を示す選手への気づきはあったか。スピーディーなコントロールが意識されていたか。

⑥パーソナリティー

迷いのない早い判断、笛の長短強弱、立ち居振る舞い等、確固としたパーソナリティーが確立されていたか。

⑦ペアとの協働

アイコンタクトが取られ、ペアの判定に適切に対応でき、役割分担ができていたか。

2. 指導の方法と留意点

- ①指導の前に、自身の評価票を振り返る時間を取ります。そして、担当レフェリーが次の試合へのモチベーションとなるべく、どのように進めていくのかポイントを絞り、プランを考える。その際、ポイントは別紙に書き出し、またマーカーなどでストロングポイントや改善点を色分けして整理しておきます。
- ②ストロングポイントは、レフェリーをポジティブな気持ちにさせることであり、小さい点でも良いので少なくとも2、3点は取り上げるようにします。
- ③改良点としては、個々の判断やマネジメントを確認するのではなく、総合的に見て不足していた点（傾向）を取り上げます。また、7mTや失格など、重要な判定が求められた場面があれば確認をします。
- ④分析の時間は長い時間にならないよう、上限30分を目安に行ってください。
- ⑤まず、担当レフェリーのコメントからスタートし、レフェリー自身が疑問に感じていた場面は（可能であれば映像を確認し）振り返るようにします。
- ⑥改善点は「なぜ」そのような判断や対応を取ったのか、考えを述べさせます。次に改善するためには何を考慮すべきか、アセッサーがうまくリードし、気づきのヒントを与え、本人の言葉で引き出せるようにします。決め付けたアドバイスは避けてください。
- ⑦レフェリーからの質問を受けた後、総合的なパフォーマンスを再度振り返ってまとめます。その際も必ずストロングポイントには触れ、ポジティブな気持ちで次の試合へ臨めるよう導いてください。

■評価票、アセスメントシートの記入について

- ①試合前に評価票、アセスメントシートの上部の必要事項を記入します。
- ②試合中は、レフェリーのパフォーマンスのチェックを他のノート等に記入します。
- ③試合終了後、ミーティングをどのように進めるか整理をしながら、アセッサーコメント欄にそれぞれの項目について記入します。
- ④まず、ミーティングで必ず、全体についてレフェリーに感想を述べさせます。
- ⑤次に全体でのレフェリーの感想についてコメントをお願いします。
- ⑥次にアセッサーの気になった点について、レフェリーに質問してください。
- ⑦レフェリー、アセッサー両方のコメントの擦り合わせを行いながら、アドバイスをを行います（アドバイスについては、レフェリーの分析の方法と指導の観点に沿って）。
- ⑧レフェリーとのミーティングが終了後、評価票・アセスメントシートを記入します。
- ⑨一方的な見方での評価でなく、レフェリーとのミーティングを踏まえての評価を行ってください。
- ⑩レフェリー評価の欄は、点数ではなく、コメントで記入します。
- ⑪レフェリーへのコメントは、ミーティングでアセッサーがレフェリーに行った、全体的なアドバイスの内容を簡単に記入してください（今後の課題も含む）。
- ⑫全て記入後、再度見直しを行います。
- ⑬日本協会 競技・審判本部に提出してください。

【A・B級審査会の評価の要点について(2026年)】

評価のポイント・・・「心・技・体」を総合評価

1.人間性：礼儀や態度(競技規則筆記試験の結果も真面目かどうかを反映)

- ・審判員の心得 10 箇条①リーダーシップ②誠実さ(リスペクト)③ルールに関する知識
10 箇条すべてを満たすことができれば自ずと道は開ける(1)(2)(3)
- ・コート上で振る舞い(1)
 - a. 穏やかに b. 毅然とした c. 正しいジェスチャー(9)
 - d. ボディランゲージの活用 e. 笛の音色の強弱長短(9)
- ・連携 ペア(2) オフィシャル(2) チーム(1)との関係性
大会内での構成メンバーとしての行動

2.技術：レフェリーの仕事とは？

最初の 15分間で基準を明確に示し、その基準を試合終了まで維持する(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)

【1】モダンハンドボールの展開

- ・スピーディーな展開を不必要な笛で流れを止めない(3)
- ・ゲームの流れを優先させる(3)
しかし、競技開始の直後でも、即座に2分間退場・レッドカードを出せる準備(4)
- ・不必要なタイムアウトをとらない(8)
怪我をしたプレイヤー モップ ボール交換
- ・Prevent Action(これ以上はさせない、予防的な動作)
罰則の基準の理解(4) プレイヤーのもとに素早く駆け寄り寄るタイミングと走力(9)
- ・ゴールキーパー不在の状況(6)

【2】プレー評価:特にナイスディフェンスにより惹起されたオフENSEのミス(5)

- ・ 防御側の権利の保障。ルールは「攻撃側」「防御側」に平等に存在する(4)(5)
- ・ 安易に「攻撃側」有利な、フリースローハンドボールにしていないか(5)

【3】罰則の適用:相手に対する動作とスポーツマンシップに反する行為(4)(5)(7)

- ・ 競技規則8条 特に8の3と8の4の理解による基準づくり
8の3の判断基準を明確に持つことが重要(説明の根拠は?)
危険につながる行為(注意・警告)を見極め、危険行為(結果的に相手の安全を軽視する行為=2分間退場、失格)を排除。
- ・ Prevent Action(これ以上はさせない、予防的な動作)
- ・ 真の教育的配慮とは？

- ・ 競技の本質を根底から覆すような行為(シミュレーション、目隠し、ウイングポジションにおける防御側のロングステップ等)を排除
- ・ 8の7~8 の 11 スポーツマンシップに反する行為の理解(プロボケーション・オーバーリアクション・シミュレーション)

【4】 公平性・バランス(1)(2)(3)

- ・ 両チームへの基準のバランス
- ・ 両チームへのコミュニケーションのバランス
- ・ 両レフェリーのバランス
- ・ ミスは基準ではない
違反した側が有利になる判定は、決してあってはならない。
Small Potatoes と Big Potatoes Mosquito にこだわりすぎない
大きなミスをしないためのゲームコンディション

【5】 位置取り・領域分担:審査会における急造ペアでも常識的な範囲で(2)(9)

- ・ セット攻撃時の姿勢と観察位置 = 攻防の「間=ボール」を観察できる位置を
- ・ 速攻(リスタート、ターンオーバー)時の走路・走法と観察位置 → 特に重要!
- ・ 7mスロー時におけるゴールフェリーの立ち位置
- ・ 領域分担の考え方(ボールの有無、ゴールエリア際、ピボットの観察)エリア際の判定はゴールレフェリーが判定
- ・ 領域分担を基本に、両レフェリーで連携し正しい判定を導く
- ・ 通信機器の活用
- ・ オフィシャルとの連携 試合前 試合中 試合後
得点と時間の管理は、レフェリーの任務である(1)(2)(8)
全てが台無しになる恐れがある

3.体力:日頃のトレーニングの成果を!仲間意識をもって励まし合いながら!(1)(9)

《上達のために》審判員の倫理綱領・審判の心得10箇条に従えば自ずと道標は

- | | |
|--------------|--------------------|
| ① リーダーシップ | トレーニングを行う意識 |
| ② 誠実さ(リスペクト) | まじめにトレーニングに取り組む |
| ③ ルールに関する知識 | 試合に合わせた走法や走るコースの研究 |
| ⑤ 正しい判断 | トレーニングの必要性の理解 |
| ⑥ 身体上の適正 | 体カトレーニング |
| ⑨ 協調性 | レフェリーチームの一員としての体力 |
| ⑩ 仲間意識 | 励まし合いながらレベルの向上をめざす |

注:(1)~(9)についてはレフェリー評価票の項目(1)~(9)に反映されるものである



レフェリー評価票〔2026 全日本大会用〕

氏名・ペア名	/	所属	期 日	年 月 日
大会名			会 場	
評価者	対戦	VS	男・女	結果

総 合 的 な 評 価

レフェリーの総合評価は	<input type="checkbox"/> とても良い <input type="checkbox"/> 良い <input type="checkbox"/> 概ね良い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> ほぼ適切 <input type="checkbox"/> やや不十分 <input type="checkbox"/> 不十分
このゲームは(難易度)	<input type="checkbox"/> とても難しい <input type="checkbox"/> 難しい <input type="checkbox"/> やや難しい <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 簡単 <input type="checkbox"/> レフェリーがゲームを難しくしてしまった
なぜ難しかったか	<input type="checkbox"/> 結果・得点経過 <input type="checkbox"/> ベンチの振る舞い <input type="checkbox"/> 観客の影響 <input type="checkbox"/> スピード <input type="checkbox"/> 戦術 <input type="checkbox"/> 違反行為 <input type="checkbox"/> その他(下欄に具体的に記入)

項目ごとの評価	とても良い	良	適	不十分	コ メ ン ト (優れている点・改善すべき点など)
(1) ゲーム管理・運営(モダンハンドボールの理解)	レフェリーとしての要素・全体的印象				
	振る舞い・選手・役員とのコミュニケーション				
	チームとの関係・平等であるか				
(2) 連携	チームワーク(オフィシャルを含めて)				
	ペアで均一な判定				
	領域分担				
(3) ゲームの理解	レベル・カテゴリーに応じた基準				
	アドバンテージ・不必要な笛・発展性のないプレーの見極め・笛のタイミング				
(4) 1対1の局面	罰則・8:4にある即座に2分間退場への準備				
	チームに基準が理解されているか				
	オーバーリアクション・プロボケーション・シミュレーションの見極め				
(5) 攻撃側の違反	ボールを持ったプレーヤーの違反				
	ボールを持たないプレーヤーの違反				
	正しいブロック / 不正なブロック				
(6) 7mスロー	明らかな得点チャンスの見極め				
	ゴールエリアへの侵入と影響の見極め				
	ボールを所持していない明らかなチャンス				
(7) 違反	ステップ・ダブルドリブル・オーバータイム・明らかな着地シュート				
	足を使った違反				
	各種スローの判定と適切な実施				
(8) 時間の管理(モダンハンドボールの理解)	パッシングプレー予告合図のタイミング				
	パッシングプレーの判定				
	的確なタイムアウト・不要な中断をしない				
(9) 動き 位置取り ジェスチャー	動きと位置取り・笛をどこで吹くか				
	明確なジェスチャー・笛の音				
	体力・走力				
レフェリーへのアドバイス ・ 特記事項など					

レフェリー評価における着眼点

項	目	着 眼 点
(1)ゲーム管理・運営(マウンドボールの理解)	レフェリーとしての要素・全体的印象	試合に関する確な態度であるか。正しい判断基準に基づいた確な競技規則の運用ができてきているか。
	振る舞い・選手・役員とのコミュニケーション	不自然な、不安定な態度ではないか。集中力を欠いているような仕草が見えないか。チーム役員・プレーヤー・オフィシャルに対し、基準を明確に伝えるようボディランゲージや口頭による説明ができてきているか。ベンチ管理(交代プレーヤー・チーム役員)。
	チームとの関係・平等であるか	試合に関する感情。おだやかで公平な態度であるか。一方のチーム役員やプレーヤーと接触していないか。弁解や妥協しがちではないか。ヤジとか批判に簡単に影響されていないか。
(2)連携	チームワーク(オフィシャルを含めて)	誰が見ても分かるように、ペア・オフィシャルとの協力ができているか。
	ペアで均一な判定	1人のレフェリーが支配したり、されたりしていないか。ペア間のバランス。
	領域分担	パートナーの責任範囲を侵していないか(特にゴールエリア際)。侵していることに気づいているか。
(3)ゲームの理解	レベル・カテゴリーに応じた基準	プレーヤーの発達段階を考慮し、ゲームの流れを理解しているか。ゲームの流れに反した判定をしていないか。
	アドバンテージ・不必要な笛 発展性のないプレーの見極め 笛のタイミング	明らかな得点チャンスでのアドバンテージを見ているか。アドバンテージ後の罰則を与えているか。競技規則に反するプレーに対してのアドバンテージを与えていないか。不要な笛でプレーを止めていないか。発展性のないプレーの見極めと、特に攻防が切りかわる笛のタイミングは適切か。
(4)1対1の局面	罰則 8:4にある即座に2分間退場への準備	許容範囲のタフなプレーとアンフェアなプレーの区別ができてきているか。競技規則第8条(違反・スポーツマンシップに反する行為)に一致しない罰則を与えていないか。
	チームに基準が理解されているか	罰則が良いバランスで判定されているか。
	オーバーアクション・プロボケーション・シミュレーションの見極め	オーバーアクション・プロボケーション・シミュレーションを見抜き、予防的な処置を含めた、適切な処置ができてきているか。
(5)攻撃側の違反	ボールを持ったプレーヤーの違反	違反を見逃していないか、探していないか。正しい防御活動を認めているか。また、明確なボディランゲージでプレーヤーへ基準を知らせているか。
	ボールを持たないプレーヤーの違反	
	正しいブロック/不正なブロック	
(6)7m スロー	明らかな得点チャンスの見極め	防御側プレーヤーとの位置関係から、明らかな得点チャンスを見極め、適切に7m スローを与えているか。明らかな得点チャンスではないにもかかわらず7m スローを与えていないか。
	ゴールエリアへの侵入と影響の見極め	
	ボールを所持していない明らかなチャンス	
(7)違反	ステップ・ダブルドリブル・オーバータイム・明らかな着地シュート	正しく判定しているか。明らかな得点チャンスを妨害され着地してシュートした場合は、7m スローに戻しているか。
	足を使った違反	
	各種スローの判定と適切な実施	各種スローが正しく実施されているか。3m の距離を観察できているか。修正後の処置は適切か。
(8)時間の管理 (マウンドボールの理解)	パッシブプレー予告合図のタイミング	判断基準に則り、予告合図のタイミングは適切か。
	パッシブプレーの判定	違反の判定のタイミングは適切か。
	的確なタイムアウト・不要な中断をしない	ルールに則って両チームに平等に与えているか。与え過ぎていないか。遅過ぎないか。
(9)動き 位置取り ジェスチャー	動きと位置取り・笛をどこで吹くか	2人の死角はないか(プレーヤー・ボールから目を離していないか)。サイドチェンジは適切か。
	明確なジェスチャー・笛の音	ルールブックにないジェスチャー、はっきりしないジェスチャーを用いていないか。最初に方向指示をしているか。笛の音は適切か(弱すぎる・大き過ぎる・挑発的など)。
	体力・走力	セット時・速攻時の攻防の観察動作、得点の観察位置は適切か。レフェリングをするにあたり十分な体力・走力を有しているか。



レフェリー評価票の記入方法

2026年版

(公財) 日本ハンドボール協会審判本部

- 現在国内で使用している「レフェリー評価票」は、IHF で使用しているものと同様である。2016年2月、香港にて行われた AHF チーフレフェリー・TDセミナーにおいて、その記入の仕方について、下記の通り具体的に説明がなされた。国内の上級審判員審査会および、全日本大会審判員評価においても、この評価票を使用し、審判員へのフィードバックおよび指導に役立てていく。

1 「レフェリーの総合評価」

7段階で評価する。以下にその基準を示す。

評価項目の(1)～(3)は、審判員としての基本姿勢に関わる大切な項目である。全日本大会審判員(A級・B級)評価においては、(1)～(3)の項目において「適切」以上の評価がつくことが条件となる。また、**A級審査においては、(1)～(3)の項目において「良い」が2つ以上つくことが条件**となる。

(1)とてもよい……トップレフェリー、指名レフェリーに求められる

- レフェリーの判定ミスがほとんどなく、ゲームに影響を与えていない。
- 基準がとても明確で理解しやすい。
- ペア間でのバランスがよい。

○**すばらしいゲーム運営がなされており、明らかにレフェリーが受け入れられている。**

(2)良い……A級審判員の合格ライン(2017年改訂)

- レフェリーの判定ミスが少ししかなく、ゲームに影響を与えていない。
- 基準が理解しやすい。

○**すべての項目において、「不十分」の評価がつかないこと**

○**(1)～(3)の項目において、「良い」の評価が2つ以上つくこと**

○**(4)～(9)の項目において、「良い」の評価が3つ以上つくこと**

○**適切なゲーム運営がなされており、レフェリーは概ね受け入れられている。**

(3)概ね良い……レフェリーコースの合格ライン(2017年改訂)

- レフェリーの判定ミスが少しあるが、ゲームに影響を与えていない。
- 基準にややぶれがあるが概ね理解しやすい。

○レフェリングの「評価項目」(4)～(9)の中で、**不十分な項目が1つしかない。**(例 (4) 1対1の局面 罰則 など)

○**「項目ごとの評価」(1)～(3)において「適切」以上の評価がつく。**

(4)適切……全日本大会審判員・B級審判員の合格ライン

- レフェリーの判定ミスは少しあるが、ゲームに影響を与えていない。
- 基準にぶれがあるものの、

○レフェリングの「評価項目」(4)～(9)の中で、**不十分な項目が2つある。**(例 (4) 1対1の局面 罰則 (7) 違反 ステップ など)

○**「項目ごとの評価」(1)～(3)において「適切」以上の評価がつく。**

(5)ほぼ適切

- レフェリーの判定ミスは多いが、試合結果には大きな影響を与えていない。(例 点差の開いた試合 等)

○**基準のぶれが大きく、一貫していない。**

○レフェリングの「評価項目」(4)～(9)の中で、**不十分な項目がいくつかある。**(例 罰則 ステップ 攻撃側の違反 等)

○**「項目ごとの評価」(1)～(3)において「適切」以上の評価がつく。**

(6) やや不十分

- レフェリーの判定ミスは多いが、試合結果には大きな影響を与えていない。
(例 点差の開いた試合 等)
- 基準のぶれが大きく、一貫していない。
- レフェリングの「評価項目」(4)～(9)の中で、不十分な項目がいくつかある。(例 罰則 ステップ 攻撃側の違反 等)
- 「項目ごとの評価」(1)～(3)において「不十分」の評価がつく。

(7) 不十分……初心者、未経験のレフェリー

- レフェリーの判定ミスが多い。
- 多くの判定ミスが明らかに試合結果に影響を与えている。
- 基準のぶれがとても大きい。
- レフェリーの勝手な判断が、ゲームに影響を与えている。
- レフェリーはゲームを理解していない。
- 明らかにレフェリーがゲームをコントロールできていない。

2 「項目ごとの評価」4段階

(1) とても良い

- 申し分がなく、判定ミスがほとんどない。

(2) 良い

- 概ね満足できる、基準のぶれが少なく、チームにも受けいれられている。

(3) 適切

- 判定ミスがあり、改善は必要であるが、基準のぶれは少なく、チームにも受け入れられている。

(4) 不十分

- 判定ミスも多く、基準が受け入れられない。改善を要する。

3 「コメント」


- 別紙「レフェリー評価に関する着眼点」を参考に、レフェリーに対して今後改善を要する点について具体的に記載する。
- 上級審査会においては、審査に合格・不合格した理由について具体的な記載があるとよい。レフェリーにとって今後何を努力していくべきなのか明確にし、指導・および評価の一体化を図る。
- 評価票裏面については、審査の際メモとして使用する程度で活用し、必要に応じて指導に役立てる。

例)

(6) 7mスロー	明らかな・	○	十分に身体をコントロールして打ったものに与えている
	ゴールエリア・		
	ボール・		

④ 「ゲームの難易度」

- 試合全体を客観的に観察して、難易度がどうであったかをチェックする。
- 「とても難しい」「難しい」「やや難しい」についてはその理由としてあてはまる項目をチェックする。(複数可)
- 「レフェリーがゲームの流れを作った」は意図的な介入があったと疑われる場合にチェックする。

	審判指導チェックシート		
(1) ゲーム管理・運営 (モダンハンドボールの理解)	両審判員、TD が立会いのもとトスを実施。メンバー表、登録証の確認。ユニホームの選択は適切か		
	ゴールやゴールネット、ボールの確認を行ったか。定刻でのスローオフか		
	コート上での立ち姿、振る舞い、選手・役員とのコミュニケーション		
	ペアで同じ種類の黒い笛を使用しているか。口にくわえたまま観察していないか		
(2) 連携	オフィシャルとの連携・得点、公示時計の管理		
	役割分担は明確であるか(ペアの領域を判定していないか)。ペア間のバランス。		
	差し違えた場合、必ず①タイムアウト ②ペアで協議をしているか		
(3) ゲームの理解	コート上の安心・安全は確保されているか		
	アドバンテージが正しく判定されているか		
(4) 1対1の局面	8の4「即座に2分間退場」を見極めているか。「ハードプレー」と「ラフプレー」は見極められているか		
	プロボケーション・シミュレーション・オーバーリアクションへの対応		
(5) 攻撃側の違反	違反を見逃していないか、探していないか。正しい防御活動を認めているか。明確なボディランゲージで基準を知らせているか。など		
(6) 7mスロー	防御側プレーヤーの位置関係から明らかな得点チャンスを見極め、適切に7mスローを判定しているか。ノーゴールキーパー時の状況は整理できているか。など		
(7) 違反	違反を正しく判定しているか。明らかな得点チャンスを妨害され着地してシュートした場合は、7mスローに戻しているか。など		
	各種スローが正しく実施されているか。3mの距離を観察。修正後の処置。など		
(8) 時間の管理(モダンハンドボールの理解)	パッシブプレーの基準は統一されているか		
	「ウォーキングハンドボール」を認めていないか		
	不要なタイムアウト(チェンジボール・エリア内にモップを入れるタイミング)		
	負傷者への対応は適切であったか		
(9) 動き・位置取り・ジェスチャー	コート上の選手とボールから目を離していないか。判定後、選手とボールの動きを確認してから、次の行動に移っているか。走法に問題はないか。		
	ゴールレフェリーの際に同じ位置に立ち続けないか(基本位置は6mラインとゴールポストの中間)、状況に応じて素早く移動できているか		
	7mスロー時コートレフェリー:スローアの利き腕側・GKを観察できる位置か		
	得点合図の後に、位置を交代していないか。バックステップで動いていないか		
	GKなしでの攻撃(6人 or 7人)で、審判の位置取りは妨げになっていないか		
	手順は正しいか ①笛 ②方向指示 ③ジェスチャー(必要に応じて) ④ボディランゲージ 退場を判定の際、①タイムアウト ②ジェスチャー14 になっているか		
	正しいジェスチャーを用いているか。※罰則や7mTを判定した後は、はっきりと1回		

所属		レフェリー名	
----	--	--------	--



レフェリーアセスメントシート

大会名		会場			
レフェリー名	A / B	所属	期日	年	月 日
アセッサー名		対戦 ^a	vs ^b		男・女
レフェリーの課題設定					
レフェリーの自己評価					
レフェリーの総合評価	<input type="checkbox"/> とても良い <input type="checkbox"/> 良い <input type="checkbox"/> 概ね良い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> ほぼ適切 <input type="checkbox"/> やや不十分 <input type="checkbox"/> 不十分				
このゲームの難易度	<input type="checkbox"/> とても難しい <input type="checkbox"/> 難しい <input type="checkbox"/> やや難しい <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 簡単				

アセスメントの際の主なキーワード	5	4	3	2	1	コメ ン ト
<input type="checkbox"/> 1 リーダーシップ						
<input type="checkbox"/> 2 人間性						
<input type="checkbox"/> 3 強 さ						
<input type="checkbox"/> 4 コート上での立ち居振る舞い - 位置取り(), 走り方(), 動き方(), 立ち姿(), 笛の音色()						
<input type="checkbox"/> 5 モダンハンドボールの理解						
<input type="checkbox"/> 6 情報発信 - ゼスチャー(), BL(), 笛の吹き方(), 予防的行動()						
<input type="checkbox"/> 7 判定基準の提示・維持 - 15分間(), 試合終了まで()						
<input type="checkbox"/> 8 罰則の適切な運用						
<input type="checkbox"/> 9 オーバーリアクション、フロケーション、 シミュレーションへの対応						
<input type="checkbox"/> 10 ゴールエリア際、7mスロー						
<input type="checkbox"/> 11 ピボットゾーンの管理						
<input type="checkbox"/> 12 パッシブプレー						
<input type="checkbox"/> 13 ステップ						
<input type="checkbox"/> 14 各種スローの実施について						
<input type="checkbox"/> 15 バランス - ペア間(), 近い時間帯(), チーム間()						
<input type="checkbox"/> 16 協働作業 - ペア間(), TO・テーブル()						
<input type="checkbox"/> 17 ベンチとの関係						
<input type="checkbox"/> 18 (体力を含む)集中力 - 中断後(), 試合終盤()						
<input type="checkbox"/> 19 試合終盤(残り10分間)のマネジメント						
<input type="checkbox"/> 20 その他						

レフェリーへのアドバイス (良い点、改善すべき点等)	(Aに対して) (Bに対して)
--------------------------------------	------------------------



レフェリーアセスメントシート・着眼点

アセスメントの際の主なキーワード	リーグレフェリーとしての着眼点 観察・評価の視点
1 リーダーシップ	試合前からの姿勢。コート内でプレーヤーをウォーミングアップ。「定刻での試合開始」「中断後の再開」「適切な介入と情報発信」などがプレーヤー・チームに伝えられていない。
2 人間性	【2,3共通】喜怒哀楽を表現できる。真剣な場面でへらへらしない。常に「受け入れる」姿勢。スポーツマンシップに反する行為への毅然とした対応。常に指摘ばかりにならない。改善に対する評価。「強さ」の前に「誠実さ」「優しさ」を表現できる。
3 強 さ	
4 コート上での立ち居振る舞い	コート上のプレーヤー、交代地域の役員、プレーヤーの「視野内」に入る位置取り。コート・ボールから決して目を離さない走法。得点の後の素早いリスタートへの対応。明確で美しいジェスチャー・BL・方法指示。脇を締め、上半身の体幹がぶれない構え、観察姿勢。無駄な動き(細かい移動、首振り、腕振り)が少ない。目を閉じて聴いててわかる判定・プレーの質が伝わる笛の音色。
5 モダンハンドボールの理解	【5,6共通】円滑な競技運営のための先手を打ったプレーヤー、関係者とのコンタクト(ボール、コートコンディション、負傷者への対応、両レフェリーの協議)。競技を展開させながら、BLや口頭注意を用いたプレーヤーとのコンタクト、予防的な働きかけ。罰則適用、7mスロー適用の際の適切なBLの提示。BLが会場全体に理解されるように提示されているか。メリハリのある笛(特に最近、タイムアウトの後の再開の笛が「軽く・小さい」レフェリーが増えている)。罰則の質が伝わる、立ち居振る舞い、笛の吹き方であるか。競技規則の条文や根拠、常識に基づいた情報発信、説明が行われているか。
6 情報発信	
7 判定基準の提示・維持	【7,8共通】前半15分で示すべき基準(コンタクトプレー(防御側・攻撃側双方)、ピボットゾーン、ウィングゾーン、ゴールエリア際、攻撃側の違反、各種スローの実施、パッシブプレー、ベンチ管理等)それが、試合展開の状況に関係なく試合終了まで維持できているか。後半になって基準が明らかに変わっていないか(改善であれば良いが、突然甘く、またはきつくなっていないか)。即座に2分間退場とすべき違反行為を警告や口頭注意に、レッドカード相当の違反を、2分間退場にしていないか。
8 罰則の適切な運用	
9 オーバーアクション・プロボケーション、シミュレーションへの対応	最初に起こったタイミングを見逃さない。疑わしい場合であっても、レフェリーの視点で注意喚起を促す。繰り返される、または明らかな場合は罰則の適用を行う。「オーバーアクション」は、そもそも相手の行為の影響によるものである。罰則を適用する際は、周囲に明確で、試合展開からもリスクが少ない状況であることも考慮すべき。
10 ゴールエリア際、7mスロー	【10,11共通】ゴールエリア侵入(攻撃側・防御側ともに)に対する観察、違反行為に対する適切な対応。コートレフェリーからのピボットゾーンに対する明確な基準指示と情報発信。明らかな得点チャンスの定義に則った判定。GK不在の場合の判定。最終局面で防御側の影響があったか。防御側の接触をすべて違反にしていないか。防御側に違反があったが、攻撃側が十分に身体をコントロールしている場合(14:2第1段落)。
11 ピボットゾーンの管理	
12 パッシブプレー	ウォーキングハンドボールへの対応。予防的行為。予告合図を示すまでの基準。度重なる位置修正、自チームに退場者がいる場合。予告合図を示した後の、次のスローの回数の伝え方。予告なしで判定する場合。
13 ステップ	「0」ステップ、「1」ステップの見極め。4歩以上を踏ませることにより、得点や防御側の罰則につながるかもしれないように。発展性のないプレーに対する笛のタイミングも同様。
14 各種スローの実施について	スローを行うプレーヤーの原則(「立つ」の定義 15:1【注】)、相手チームのプレーヤーの管理。味方チームのプレーヤーの管理。特にクイックスローオフ等違反から得点につながるかもしれないように。
15 バランス	大前提として、両レフェリーが「対等」であるか。一方のレフェリーが主導権を握っていないか。コート内ではペアを尊重する雰囲気を示す。各種判定に関し、ペア間での基準は妥当か。ターンオーバー、7mスロー、罰則の判定に関し、近い時間帯でもう一方のチームが起こした場合に同様に対処されているか。逆に、「埋め合わせ」的な判定を意図していないか。両チーム役員やプレーヤーとのコンタクトの時間に、チーム間の明らかな偏りはないか。
16 協働作業	ペア間 → 「ピボットゾーン」「シュートの軌道」「リスタート」「負傷者」「マンツーマンDF」など、周囲に明確に伝わる工夫も含めて。TO・テーブル → 「得点の管理」は最優先。競技の中断、再開。罰則の提示、レフェリーからTOへのベンチ管理の依頼。
17 ベンチとの関係	良好な関係づくりを前提としたコンタクト(バランスを前提に)。スポーツマンシップに反する行為に対する毅然とした対応。TOとの協働作業(TO任せにはしない)。
18 (体力を含む)集中力	競技再開後(タイムアウト後、チームタイムアウト後、後半開始後)に起こりやすい「見逃し(無反応)」「基準の緩み」「起こり得るプレーへの準備不足」を起こさない工夫。試合の勝敗を決定づける「見逃し」「それまでの基準とは明らかに異なる運用」を避ける。
19 試合終盤(残り10分間)のマネジメント	この時間帯までに基準が示され、両チームはこの基準の中で試合を行うことが理想であり、笛は明確に必要なときに吹かれるべき。この時間帯で、これまでの基準とは異なる判定や、これまでになかったレフェリーによる介入が行われると双方のチームに違和感を残すことになる。
20 その他	特殊な場面におけるレフェリーの対応について、特記することがあれば記載する。



レフェリーアセスメント・記入例

大会名			会場			
レフェリー名	A	/	B	所属	期日	年 月 日
アセッサー名			対戦 ^a	vs ^b		男・女
レフェリーの課題設定	試合前に両レフェリーに確認したことを記入してください。					
レフェリーの自己評価	試合後、振り返りの際に行われたレフェリーの自己評価を記入してください。					
レフェリーの総合評価	<input type="checkbox"/> とても良い <input type="checkbox"/> 良い <input type="checkbox"/> 概ね良い <input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> ほぼ適切 <input type="checkbox"/> やや不十分 <input type="checkbox"/> 不十分					
このゲームの難易度	<input type="checkbox"/> とても難しい <input type="checkbox"/> 難しい <input type="checkbox"/> やや難しい <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 簡単					

アセスメントの際の主なキーワード	5	4	3	2	1	コメント
<input type="checkbox"/> 1 リーダースhip		✓				<p>◆ 評価の際は、 5：とても良い 4：良い 3：適切 2：やや不十分 1：不十分 で評価してください</p> <p>※ 5または1については、明確な場合につけてください</p> <p>◆ 各項目の着眼点を示すキーワードに中の()は ○や△、×のいずれかを記入してください</p> <p>◆ コメント欄には、特記すべきことのみを、 キーワードの番号を冒頭につけて記入ください</p> <p>例：7. 前半15分までに、BLや口頭で基準を発信できていたが、特に試合終盤でのエリア際に関して、前半15分に示した基準と異なっていた</p>
<input type="checkbox"/> 2 人間性		✓				
<input type="checkbox"/> 3 強さ						
<input type="checkbox"/> 4 コート上での立ち居振る舞い - 位置取り()、走り方()、 動き方()、立ち姿()、 笛の音色()						
<input type="checkbox"/> 5 モダンハンドボールの理解						
<input type="checkbox"/> 6 情報発信 - ゼスチャー()、BL()、 笛の吹き方()、予防的行動()						
<input checked="" type="checkbox"/> 7 判定基準の提示・維持 - 15分間(○)、試合終了まで(×)			✓			
<input type="checkbox"/> 8 罰則の適切な運用						
<input type="checkbox"/> 9 オーバーリアクション、プロポーション、シミュレーションへの対応						
<input type="checkbox"/> 10 ゴールエリア際、7mスロー						
<input type="checkbox"/> 11 ピボットゾーンの管理						
<input type="checkbox"/> 12 パッシブプレー						
<input type="checkbox"/> 13 ステップ						
<input type="checkbox"/> 14 各種スローの実施について						
<input type="checkbox"/> 15 バランス - ペア間()、近い時間帯()、 チーム間()						
<input type="checkbox"/> 16 協働作業 - ペア間()、TO・テーブル()						
<input type="checkbox"/> 17 ベンチとの関係						
<input type="checkbox"/> 18 (体力を含む)集中力 - 中断後()、試合終盤()						
<input type="checkbox"/> 19 試合終盤(残り10分間)のマネジメント						
<input type="checkbox"/> 20 その他						

レフェリーへのアドバイス (良い点、改善すべき点等)	(Aに対して)	レフェリーへのアドバイスは、 レフェリーAおよびレフェリーB、それぞれに対して記入してください
	(Bに対して)	

【 試合分析・記入例 】



対 象	クリップ番号 / 試合時間	評 価 / 確 認	状 況
レフェリー	クリップ1	要確認	(前半12'12"、ウイングからのシュート場面) レフェリーは7mスロー(罰則の適用はなし)を判定。DFは接触の瞬間は止まっているものの、ロングステップを用いて接触の位置まで移動、かつ相手に背中を向ける形で止まっていますか。
aチーム	14'08" 19'23" 34'45"	要確認	(Aチームに対して) この試合、貴チームのプレーヤーは、相手の違反を誘発させるような行為が多々感じましたが、チームとして、どう感じていたのか、意見を伺えたらと思います。
レフェリー	クリップ3	好事例	近い時間帯に起きた似たような事象であったが、レフェリー間で、同じ基準のもと判定していたので、チームも納得した場面であった。
両チーム	23'24"	好事例	倒れているプレーヤーへ手を差し伸べている、スポーツマンシップに則った行為として評価できる。
bチーム	32'09"	要確認	(Bチームに対して) 「事あるごと」に、レフェリーを「呼び寄せて」確認しようとしています。局面、相手チームとのバランスの関係から対応できないこともありますのでご理解ください。
TO	13'10"	好事例	レフェリーの判定に対する、チーム役員の過度なアピールに対して、適切に対応していました。
その他		要確認	観客席より、笛の音色に近い音が聞こえたことが2~3回あったと感じた。選手の動きも、この音に反応しているように感じたが、レフェリー、TOなどはどうでしたか？
<p><シート裏面に入力するに当たって></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ オレンジ色の塗りつぶし箇所(A列、C列)は、項目を選択できます。入力したいセルを右クリックすると、右下に「▼」マークが出てきます。その▼を右クリックすると、項目が選択できます。 ◆ それ以外の箇所(B列、D列)は、ご自身で入力ください。 ※ 手書きの場合は、すべてご自身でご記入願います。 ◆ 映像提出(共有)がない場合、B列に時間を記入ください。 ◆ 作成の際には、担当レフェリーへ改善のヒントを与え、今後の意欲喚起につなげる内容にて作成ください。 			
MEMO			



アセスメント・チェックシート

キーワード

着眼点

メモ・時間等

キーワード	着眼点	メモ・時間等
1	リーダーシップ	試合前の姿勢
		定刻で開始・中断後の再開・適切な介入と情報発信
2 3	人間性 強さ	喜怒哀楽・ヘラヘラしない「受け入れる」姿勢
		スポーツマンシップに反する行為への毅然とした対応
		指摘→改善への評価 「強さ」の前に「誠実さ」「優しさ」
4	コート上での 立ち居振る舞い	位置取り 走法
		姿勢 明確で美しいジェスチャー・BL・方向指示
		無駄な動き（細かい移動、首振り、腕振り）が少ない
		プレーの質が伝わる笛の音色（目を閉じていてもわかる）
5 6	モダンハンドの理解 情報発信	プレーヤー、関係者とのコンタクト
		競技を展開させながら、BLや口頭注意 予防的行動
		罰則、7mスローの際 適切で会場全体に理解されるBL
		罰則の質が伝わる、立ち居振る舞い、笛の吹き方 競技規則の条文や根拠、常識に基づいた情報発信、説明
7 8	判定基準の提示・維持 罰則の適切な運用	前半15分のマネジメント
		試合展開の状況に関係なく、試合終了まで基準を維持
		後半になって基準が明らかに変わっていないか
		D2min、レッドカードの基準
9	8:7、8:8への対応	最初に起こったタイミングで介入 注意喚起
		繰り返される、または明らかな場合の罰則適用
10 11	ゴールエリア際 7mスロー	ゴールエリア侵入に対する観察、適切な対応
		CRからPVゾーンに対する明確な基準指示と情報発信
		明らかな得点チャンスの定義に則った判定
		GK不在の場合の判定
		最終局面 防御側の接触をすべて違反にしているか
12	パッシブプレー	ウォーキングハンドボールへの対応・予防的行為
		予告合図を示すまでの基準 予告なしでの判定
		予告後の度重なる位置修正 自チームに退場者がいる場合
		予告合図を示した後の、スローの回数の伝え方
13	ステップ	「0」ステップ、「1」ステップの見極め
		4歩以上→得点や防御側の罰則
		発展性のないプレーに対する笛のタイミング
14	各種スローの実施	スローを行うプレーヤーの原則 クイックスローオフ等の違反
15	バランス	両レフェリーが「対等」か
		ターンオーバー、7m、罰則 近い時間帯・もう一方のチーム
		「埋め合わせ」的な意図が見られる判定
		両チームとのコンタクトの時間 偏りはないか
16	協働作業	ペア間の協働作業
		T0・テーブルとの協働作業
17	ベンチとの関係	良好な関係づくりを前提としたコンタクト バランスの意識
		スポーツマンシップに反する行為に対する毅然とした対応
18	(体力含む) 集中力	競技再開後（タイムアウト、チームタイムアウト、後半開始）
		「基準の緩み」「起こり得るプレーへの準備不足」
19	試合終盤（残り10分）	ぶれない基準 運用 ラスト10分の意識
		競技終了前30秒間

【令和 8 年度（2026 年度） 審判員の目標】

令和 8（2026）年 4 月 1 日

（公財）日本ハンドボール協会 競技・審判本部
指導普及本部

I 『審判員としての人間性』（笛は人格を現す）

・審判員の心得 10 箇条（別添資料①）

- | | |
|-------------------|------------|
| ① リーダーシップ | ⑥ 身体上の適正 |
| ② 誠実さ（リスペクト） | ⑦ ユーモアのセンス |
| ③ ルールに関する知識（競技規則） | ⑧ 勇気 |
| ④ 冷静さ | ⑨ 協調性 |
| ⑤ 正しい判断 | ⑩ 仲間意識 |

2 『ゲームマネジメント』（別添資料②、③）

（1）『ハンドボールのイメージを守る』

- ・プロボケーション・オーバーリアクション・シミュレーション・・・競技規則 8：7、8：8 の適切な運用
- ・ピボット(PV)ゾーンの攻防の管理は、コートレフェリー・ゴールレフェリーの協働作業
- ・ユニフォームを掴むプレーに対し、早い段階から、適切な対応および判定

（2）『選手の安心・安全の確保』

- ・安心・安全のための「ゲームマネジメント」
- ・危険な行為に対する判定の基準・・・競技規則 8：3 の判断基準を踏まえた、8：4、8：5、8：6 の適切な運用
- ・ウイングシュートに対する防御行為 ” Long Step” と “Foot on Foot”
- ・試合開始 15 分間で「カテゴリーに対応した適切な基準」を示し、その基準を「試合展開に関係なく」、「試合終了まで維持」する。

（3）『公平性・バランス』

- ・違反した側が有利になる判定は、決してあってはならない。
- ・試合終盤（僅差の場合や、残り 10 分を切ってからは全ての試合において）の集中力を高め、維持する。この時間帯にミスが決してあってはならない覚悟で試合を運営する。
- ・バランス（判定のバランス、両レフェリーのバランス、両チームへの運用のバランス、特に近い時間帯）を常に意識し、試合を運営する。

令和 8 年度（2026 年度）各級公認審判員の目標



(公財) 日本ハンドボール協会 審判本部

審判員に対し JHA / 連盟 / ブロック / 都道府県協会審判委員会が、共通の目標を持ち、一貫した指導をすることが必要である。

国内の審判員の多くは都道府県レベルの D 級審判員である。また各ブロック、全日本大会等で積極的に審判活動に関わっている者の多くは A 級および B 級審判員である。そのため、指導の方向としては審判員として、まず、国内最高峰である「A 級審判員」、および全日本大会を担当できる「B 級審判員」のそれぞれの目標を示す。B 級・C 級・D 級審判員がその次の目標を達成することができるように指導助言にあたることが重要になる。

審判技術の向上には以下の 4 つの要素が不可欠となる。 **※審判員の心得 10 箇条**

- 1) ハンドボールに携わるものとしての人間性
- 2) 競技規則の理解と正しい運用
- 3) 審判員としての技術
- 4) アスリートとして必要な体力

この 4 つの要素を各級審判員の目標の中に反映させ、指導助言にあたる。

1 A 級審判員の目標

A 級審判員の目標を「適切な位置取りと任務分担（対角線式審判法）によって、事実を正しく見極め、的確な判定で、試合を円滑に進めることを追究する」とする。その目標を達成するために

- ① 「レフェリー評価における着眼点」についてその項目の意味を熟知し、
 - ハンドボール競技の特徴をおよび競技規則の解釈と適用を理解した上で、行うべきこと、観察すべきことを適切に実践する。
 - 試合の流れやプレーの展開の予期・予測による実践と、審判員としての任務の遂行に努める。
- ② 瞬発力、スピード・反応性の強化を図り、持久力と的確な判断力の向上に努める。
- ③ 国内最高峰の大会である、リーグ H・日本選手権さらには日本協会指名レフェリーとして、人間性を発揮し、よき模範として大会審判長・副審判長を補佐する。

2 B 級審判員の目標

B 級審判員の目標を「競技規則を理解し、正しく運用することによって、試合を円滑に進めることを追究する」とする。

その目標を達成するために

- ① 競技規則試験において A 級審判合格ラインの 85%以上の正答率
- ② B 級審判員の目標に記載されている各項目を熟知し、
 - ハンドボール競技、競技規則、審判員の役割など基本的な知識を理解する。
 - 競技規則に従って試合を運営することと、試合を運営するための基本となる技術の習得と実践。判断基準を踏まえた説明ができるようになること。
- ③ フィジカルに対する基本姿勢を身につける。持久力をつける。
 - 体力テスト（シャトルランテスト）で男子 77、女子 67 の基準をクリアする。
- ④ 大会運営に関わる知識を身につけ、審判長（大会、各都道府県等）、競技委員長への役割や任務を理解し協力する。

3 都道府県、ブロックにおける指導について

C級およびD級審判員への指導指針

上記のA級・B級の審判員の目標に対する取り組みを踏まえ、C級およびD級審判員には特に、

- ① 競技規則に従って試合を進めるための「競技規則の理解」を深めさせる。
 - 競技規則問題集を用いての座学、ビデオテスト、各種プレゼンを用いたアイトレーニングを各都道府県・ブロックにおいて積極的に実践する。
 - 例) 競技規則問題集から基本的な問題を抜粋し、**競技規則試験において80%以上の正答率(B級審査合格基準)**。
映像資料も分かりやすいものを抜粋する。
- ② 競技規則に従って試合を進めるための笛の吹き方やのジェスチャーの示し方、基本走法の定着を図る。
- ③ 試合の中で起きる事象を見極めるために必要とされる動きの量とスピードを養う。
- ④ 試合中は失敗を恐れず、競技規則に基づいて自分が判断したように、自信をもって判定できるように助言する。
 - 例) 7mスローが必要かどうか悩むなら判定する。
罰則が必要なら判定する(警告か即座に2分間の退場なのかの判断に悩んでも、どちらかは判定できるようにする)。
※起きた事象に反応、判定する(C級に向かって精度を高めていく)。
- ⑤ 基本的な事項を教える。
 - 例) 笛が必要な場面、CRとGRのポジションと役割分担の基本
- ⑥ 試合の中で起きる事象を見極めるために必要とされる動きの量とスピードを養うようにする。
- ⑦ ハンドボールに関わる人々からの情報を得て、「ハンドボール競技」に関する理解を深めるようにする。
- ⑧ 公認審判員としての心構えを教える。
 - 例) 服装、試合の準備の仕方など
- ⑨ 体力テストにおいて、B級審判員の合格ラインである、シャトルランテスト(男子77、女子66)の基準をクリアする。

4 審判指導の基本として

「審判員の倫理綱領」を熟知させ、

- ハンドボールに関わるだけでなく、一般社会における「社会道徳」や「社会規範」について知り、実践する態度を養えるようにする。またハンドボール(審判活動)を通して見聞を広げ、広い視野をもって全日本大会・国際試合で活躍できる人材となれるよう育成する。
- 審判員としての活動によって、「審判技術の向上」を図るだけでなく、「人間性の向上」が図れるようにする。またハンドボールファミリーの一員として「仲間を尊重」し、互いを認め合うために必要なコミュニケーション力が向上するよう育成する。
- 「教わるという姿勢」を持つことは当然であるが、「自分からチャレンジして発見し学ぶという姿勢」を持って、審判活動だけでなく、「ハンドボール」に関わっていけるようにする。また「仲間と競い合う」ことによって、他者の良い面を発見し、認めあいながら成長できるよう育成する。

令和 8 年度（2026 年度）A 級公認審判員の目標



全日本大会の審判員を担当することができるのは A 級、B 級の審判員である。その中で特に A 級審判員には下記の点において期待したい。

- ① 全日本大会のみならず、リーグ H および日本選手権へのノミネートを目指し、さらには日本協会指名レフェリーとして認められ、各種大会での模範レフェリーとして活躍する。
- ② 「審判員の心得 10 箇条」を熟知し、人間性を発揮し、大会審判長、副審判長を補佐して、審判団のよきリーダーとして活躍する。
- ③ 試合において立ち居振る舞いはもちろんのこと、事実を正しく見極め、適切な判断基準を元に、的確な判定を下し、TO やオフィシャル、チームとの連携をとりながら試合を円滑に進める。
- ④ ハンドボール競技の特徴を理解した上で、試合の流れやプレーの展開の予期・予測による観察と瞬時の判断力を持つ。

以下に（公財）日本ハンドボール協会審判本部作成の「レフェリー評価票」をもとに、A 級審判員として追求したいレフェリーの姿とそのポイントを明記する。

評価項目	評価の着眼点	指導のポイント	
(1) ゲーム管理・ 運営（モダン ハンドボール の理解）	レフェリーとしての 要素・全体的印象	試合に関する的確な態度であるか。 タイミングが遅れた介入でゲームを見失ってはいないか。	○競技開始前の準備 ○リーダーシップ
	振る舞い 選手・役員とのコミ ュニケーション	姿勢は正しいか。 「穏やかに」重大な判定を下し、「明確に」チーム役員・プレーヤー・オフィシャルに対し、ボディランゲージや口頭による説明ができていないか（怒らせる・失礼である・傲慢である・親切過ぎる）。	○レフェリーの人間性 ○丁寧な指示と運営 ○TO、オフィシャルとの連携 ○チーム役員、選手との関係作り
	チームとの関係・平等であるか	試合に関する感情。公平な態度であるか。 双方にバランスのとれた判定に心がけているか。 一方のチーム役員やプレーヤーと接触していないか。 弁解や妥協しがちではないか。 ヤジとか批判に簡単に影響されていないか。	○コミュニケーションのバランス ○判定のバランス ○放置しない毅然とした対応
(2) 連携	チームワーク（オフィシャルを含めて）	誰が見ても分かるように、パートナー・オフィシャルとの協力ができているか。	○目に見えるコンタクトの雰囲気 ○通信機器の活用
	ペアで均一な判定	1 人のレフェリーが支配したり、されたりしていないか。	○領域分担と判定者が一致しているか
	領域分担	パートナーの責任範囲を侵していないか。侵していることに気づいているか。	○ゴールエリアライン間際の責任領域はゴールレフェリーである
(3) ゲームの 観察	レベル・カテゴリーに応じた基準	プレーヤーの発達段階を考慮し、ゲームの流れを理解しているか。ゲームの流れに反した判定をしていないか。	○レベルに応じて運用するがルールを変えてはならない
	アドバンテージ・不必要な笛 発展性のないプレーの見極め 笛のタイミング	明らかな得点チャンスでのアドバンテージを見ているか。 アドバンテージ後の罰則を与えているか。 ルール違反のアドバンテージを与えていないか。 不必要な笛でプレーを止めていないか。 発展性のないプレーの見極めと、笛のタイミングは適切か。	○3 歩、3 秒の保障 ○不必要な笛を減らす ○発展性のないプレーの見極め ○2 重のアドバンテージを与えない ○笛のタイミング

評価項目		評価の着眼点	指導のポイント
(4) 1対1の 局面	罰則 8:4にある即座に 2分間退場への準備	各種罰則を適用すべき判断基準を理解しているか。 許容範囲のハードプレーとアンフェアなラフプレー の区別ができていないか。 第8条に一致しない罰則を与えていないか。 スポーツマンシップに反する行為の見極めは妥当か。	○即座に2分間退場とすべきプレー を適切に見極めている ○試合開始直後からの準備 ○競技終了前30秒間の集中
	チームに基準が理 解されているか	罰則の有無の判断基準が適切か。 罰則がよいバランスで判定されているか	○判定の後のボディランゲージ ○プレーヤーへの基準の伝え方
	プロボケーション・オーバ ーリアクション・シミュレ ーションの見極め	プロボケーション・オーバーリアクション・シミュレ ーションを見抜き、予防的な処置を含めた、適切な処置ができて いるか。	○大きな声、影響と倒れ方の関係 ○心の準備
(5) 攻撃側の 違反	ボールを持ったプ レーヤーの違反	攻撃側の違反を判定すべき判断基準を理解している か。 違反を見逃していないか、探していないか。 正しいブロック/ 不正なブロック	○攻撃有利のフリースロー判定が多 くないか
	ボールを持たない プレーヤーの違反		○ゴールレフェリーがボールばかり 追っていないか
	正しいブロック/ 不正なブロック		○接触・違反のスタートの見極め
(6) 7mスロー	明らかな得点チャ ンスの見極め	適切に7mスローを与えているか。 明らかな得点チャンス の判断基準を理解している か。 明らかな得点チャンスでないものに7mスローを与え ていないか。 GK不在の状況での明らかな得点チャンス の見極め。	○防御側プレーヤーの位置観察がで きているか
	ゴールエリア侵入 と影響の見極め		○押し込まれたエリア侵入を見極 めているか
	ボールを所持して いない明らかなチ ャンス		○違反がなければ明らかな得点チ ャンスになるプレーへの心の準備
(7) 違反	ステップ・ダブル ドリブル・オーバ ータイム・明らか な着地シュート	正しく判定しているか。 明らかな得点チャンスを妨害され着地してシュート した場合は、7mスローに戻しているか。	○ステップ2歩+2歩の見極め ○ステップを誘発させる防御行為の 見極め
	足を使った違反		○足を使った行為について適切に処 置
	各種スローの判定 と適切な実施		○ポイントの指示 ○正しいスローをしたか ○防御側プレーヤーの位置 ○修正後の再開の笛
(8) 時間の管理 (モダンハ ンドボール の理解)	パッシブプレーの 予告合図のタイミ ング	適切な判断基準のもとで予告合図のタイミングは適 切か。	○選手交代、各種スローの実施の遅 延に伴う予告合図 ○退場者がいる場合
	パッシブプレーの 判定	違反を判定するタイミング、および判断基準は適切 か。	○ボールを持ったプレーヤーがゴール に向かっていて違反の笛を 吹かない
	的確なタイムアウト・不要な中断を しない	ルールに則って両チームに平等に与えているか。 与えすぎていないか。 タイミングが遅すぎていないか。	○タイムアウトを取らなければなら ない場面で適切に対処できているか ○競技時間の短縮を工夫しているか
(9) 動き 位置取り ジェスチャー	動きと位置取り・ 笛をどこで吹くか	2人の死角はないか。 攻撃側と防御側の「間」を観察しようとしている か。 プレーヤー・ボールから目を離してはいないか。 サイドチェンジのタイミングは適切か。	○防御形態に応じた領域分担が臨機 応変 ○レフェリーの基本走法 ○7mスロー時の観察位置
	明確なジェスチャー・ 笛の音	判断基準を適切に説明できる明確なボディランゲ ージを用いているか。 最初に方向指示をしているか。 笛の音は適切か(強弱、長短、軟硬の使い分け)。	○罰則、7mスロー判定の後 ○笛の音色で判定の種類がわかる
	体力・走力	レフェリングをするにあたり、十分な体力を有してい るか。	○コート上でのウォーミングアップ ○後半でも走力が維持できる

令和 8 年度（2026 年度）B 級公認審判員の目標



B 級審判員より全日本大会への参加資格が与えられる。国内のトップチームの試合を担当するためには、競技規則に従って試合を運営すること、および試合を運営するための基本となる技術を習得することが必須である。

以下に B 級審判員が習得すべき事項について記載する。コート上で 1 人のレフェリーが主導権を握るレフェリーシステムは、ハンドボール競技には適さない。パートナーと常に連携と相互理解を図り、両レフェリーは様々な状況に関する考え方が一致していなければならない。レフェリーの任務も正しく分担されなければならない。

<試合前>

- 1) トスには指定された時間に両レフェリー、TO が立ち会う。メンバー表、登録証の確認を確実に行う。また、公式記録用紙に正しく記載されているかどうか確認する。
- 2) ユニホームの確認は、必ず TO と協力し行う。色やデザインが判別し難いものは着用させない。レフェリーウェアも判別し難い色は着用しない。相手コートプレーヤーの色とチーム役員の色とが重複しないように呼びかける。また、プレーヤーの装具についても規定にあっているかどうか、TO と協力し、観察しておく。
- 3) ゴールやゴールネット、ボールなどの点検は前もって （選手紹介や選手の確認の前） 行い競技開始直前に行わない。
- 4) オフィシャル席の仕事を理解し、シンプルかつ分かりやすく各種の合図をする。試合開始前に必ずオフィシャル席と業務の確認、および機器の操作の確認を行うこと。

<試合開始時>

- 5) 競技の開始時刻を守る。（早く始めない）早めに選手紹介等が終了したとしても、開始時刻が定刻となるように TD、両チーム役員に開始までの時間を明確に伝える。

<試合中>

○ 得点の管理, 時間の管理

- 6) 得点の管理は 掲示板が正しく表記されているかどうか得点のたびに厳密に行う。着地シート等紛らわしい場合、得点が誤って追加されていないか確認する。
また、時間の管理(タイムアウト)は 1 試合を通して同一の基準で、公平かつ平等に競技規則に則って処理する。どちらか一方のレフェリーが公示時計を必ず目視し動作確認をする。

○ 走法と位置取り

- 7) コート内のプレーヤーとボールから決して目を離さない。
- 8) 得点合図の後、ゴールの後ろを通過して、決して2人の位置を交代しない。ただし、ノーゴールキーパーの状況を除く。
- 9) バックステップ走法は動きが遅く、非常に危険を伴うため用いない。
- 10) 走りながら、あるいはプレーヤーに背を向けて方向指示やジェスチャーをしない。判定の後その直後の選手、ボールの動きを必ず確認し、次の行動へ移る。
- 11) ゴールレフェリーは、コート内に立たないことを基本とし、展開に応じて前後左右に移動する。
- 12) 7mスローの際、コートレフェリーはスローするプレーヤーの利き腕側に立ち、素早く移動し、シュートの軌道とGKの動きが正しく観察出来る位置をとる。
- 13) CP7名の状況で、GKとCPの交代の妨げにならないような位置取りを。

○ 判定の手順、ジェスチャー

- 14) 判定の手順を守る。
①笛 ②方向指示〔再開方法〕 ③(必要に応じ)ジェスチャー ④ボディランゲージ
- 15) 正しいジェスチャーを用い、余計なレフェリーのアクションやコミカルな動作は慎む。

○ 立ち居振る舞い

- 16) 2人のレフェリーは、同じ種類の笛を使用する。長い時間、笛を口に入れたままにならないよう気を付ける。笛を口に入れたままで、プレーを観察することがないように。
- 17) コート上で腕組み、両手を腰に当てる、ポケットに手を入れる、休めの姿勢など論外。
- 18) 「穏やかに」判定を下し、全力で違反したプレーヤーやポイントへ駆け寄らない。

○ 役割分担

- 19) ピボットプレーヤーの観察は、コートレフェリー、ゴールレフェリーで連携する。
- 20) ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定する。
- 21) 領域分担を明確にし、ペアのレフェリーの近くで起こっているプレーに対して、遠い位置から判定をしない。

○ 競技規則の正しい運用

- 22) 警告、退場を判定する際は、その理由をボディランゲージで大きく示す(何度もやらない)。
- 23) 競技規則に則った「判断基準」のもとに判定を下す。「判断基準」をもとに説明ができる。
- 24) 指し違えたときは、必ずタイムアウトを取り2人で協議する。

<試合終了後>

- 25) 公式記録用紙に正しく記入されているかどうか確認する。



< B 級公認審判員チェックリスト >

試合前 確認チ ェック ☑	特に課 題とす る項目 に○	終了 後で きた項 目☑
------------------------	-------------------------	-----------------------

◆試合前			
1) 両レフェリー、TD が立ち合いのもとスを実施			
1) メンバー表、登録証の確認			
2) ユニホームの確認 (濃淡・デザインがはっきりしたもの: チーム同士、レフェリーウェアとチーム)			
2) チーム役員のウェアの確認 (相手チームのコートプレーヤーと重複していないか)			
2) プレーヤーの装具は、規定に沿ったものかどうかを観察			
3) ゴールやゴールネット、ボールの点検 (事前に)			
4) オフィシャルとの連携 (業務の確認、機器操作・動作の確認)			
◆試合開始前			
5) 定刻でのスローオフか			
◆試合中			
得点の管理、時間の管理			
6) 得点の管理は出来ているか (得点のたびに確認しているか)			
6) 時間の管理 (タイムアウト) は競技規則に則って処理できているか			
6) 時間の管理はできているか (目視による公示時計の動作確認)			
走法と位置取り			
7) コート上の選手とボールから目を離していないか			
8) 得点合図の後に、位置の交代をしていないか			
9) ゴールレフェリーへの移動時: バックステップで移動していないか			
10) 走りながら、あるいは選手に背を向けて方向指示やゼスチャーをしていないか			
11) ゴールレフェリー時: 同じ場所に立ち続けていないか (展開に応じて左右に移動)			
12) 7m スローの際のコートレフェリー: スロアーの利き腕側・GK を観察できる位置にいるか			
13) GK 不在時の攻撃 (6 人 or 7 人) で、レフェリーの位置どりは交代の妨げとなっていないか			
判定の手順、ゼスチャー			
14) ①笛 ②方向指示 ③(必要に応じて)ゼスチャー の判定の手順を守っているか			
15) 正しいゼスチャーを用いているか			
立ち居振る舞い			
16) ペアで同じ種類の笛を使用しているか			
16) 笛を口にくわえたまま観察していないか			
17) コート上での立ち姿はどうか (ポケットに手を入れる、休めの姿勢になっていないか)			
18) 穏やかに判定しているか (罰則を出しに行く、ポイントへ行く際、全力で駆け寄っていないか)			
役割分担			
19) ピボットプレーヤーと防御プレーヤーの攻防を、ペアで連携し観察できているか			
20) ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定しているか			
21) ペアでの領域分担は明確か (相方の近くで起きたプレーを遠い位置から判定していないか)			
19)、20)、21)について、通信機器を有効に活用できているか			
競技規則の正しい理解			
22) 警告や退場を判定する際、その理由をボディランゲージを用いて大きく示しているか			
23) 競技規則に則った「判定基準」のもと、判定をしているか			
23) 判定をする際、「判定基準」を用いて説明することができるか			
24) 差し違えた場合、必ず①タイムアウト ②ペアで協議 をしているか			
◆試合終了後			
25) 公式記録用紙に正しく記入されているかどうか確認したか			

令和 8 年度（2026 年度）C 級公認審判員の目標



C 級審判員は、公式試合（ブロック大会レベル）への参加資格が与えられる。ブロック大会は、各都道府県の代表チームの対戦であり、また全国大会の予選会である場合がほとんどである。

そのような公式試合を担当するためには、競技規則に則って試合を運営すること、および試合を運営するための基本となる技術を十分理解し、実践することが求められる。

また、競技規則の理解においては、競技規則試験において 8 割以上の正答率（B 級審判員認定に必要）が求められる。

以下に C 級審判員が十分理解し、実践すべき事項について記載する。

<大会への参加>

- 1) 審判会議、代表者会議に出席し、その大会における申し合わせ事項などの共通認識を図る。
出席にあたっては、ブレザー・ネクタイを着用する（本協会制定のものを推奨する）。
- 2) 大会審判員としての自覚を持つこと。所属都道府県の応援をしたり、他のレフェリーの批判をしたりするのは慎む。観衆、チーム関係者に見られていることを忘れない。

<試合開始時>

- 3) トスには指定された時間に両レフェリー・TD が立ち会う。メンバー表、登録証の確認を確実に行う。また、試合開始直前に公式記録用紙に正しく記載されているかどうかを確認する。
- 4) ユニホームの確認を TD と共にする。判別し難いものは着用させない。チーム役員の服装についても助言する。レフェリーウェアも判別し難い色は着用しない。
- 5) ウォーミングアップを選手と共にペアで行う。
- 6) ゴール、コートやボールの点検を行う。
- 7) オフィシャル席と業務の確認を行うこと（得点、罰則、時間の管理について）。

<試合開始時>

- 8) メンバーチェックを登録証とともに確認する。
- 9) 選手入場・挨拶の後、両チーム役員やオフィシャルと挨拶をする。

<試合中>

○ 得点の管理，時間の管理

- 10) 得点の管理は、掲示板が正しく表記されているかどうか得点のたびに厳密に行う。着地シュート等紛らわしい場合，得点が誤って追加されていないか確認する。
また，時間の管理は試合開始時，タイムアウト時，再開時にどちらか一方のレフェリーが公示時計を必ず目視し動作確認をする。

○ 走法と位置取り

- 11) CRとGRの基本的な立ち位置や動きを意識する。
CRは判定の後にポイントに素早く移動する。
GRへの移動時，バックステップ走法は動きが遅く，非常に危険を伴うため用いない。
- 12) 7mスローの際，コートレフェリーはスローするプレイヤーの利き腕側に立ち，素早く移動し，シュートの軌道とGKの動きが正しく観察出来る位置をとる。

○ 判定の手順，ジェスチャー

- 13) 判定の手順を守る。
①笛 ②方向指示〔再開方法〕 ③(必要に応じ)ジェスチャー
競技規則に記載されているジェスチャーを用いる。

○ 立ち居振る舞い

- 14) 2人のレフェリーは，同じ種類の笛を使用する。長い時間，笛を口に入れたままにならないよう気を付ける。笛を口に入れたままで，プレーを観察することがないように。

○ 役割分担

- 15) ゴールエリアライン際の判定は，ゴールレフェリーが判定する。
- 16) ピボットプレイヤーの観察は，コートレフェリー，ゴールレフェリーで連携する。

○ 競技規則の正しい運用

- 17) 警告，退場を判定した際は，その理由をボディランゲージで大きく示す。
- 18) 指し違えたときは，必ずタイムアウトを取り2人で協議する。

<試合終了後>

- 19) 試合終了の挨拶（両チーム役員・オフィシャル）をして，公式記録用紙に正しく記載されているのを確認後サインする。
- 20) 大会審判長や他のレフェリーに助言を求める。審判手帳に記載する。
審判長に捺印をお願いする。



< C 級公認審判員チェックリスト >

試合前、確認チェック☑	特に課題とする項目に○	終了後でできた項目☑
-------------	-------------	------------

◆大会への参加			
○ 審判会議、代表者会議に参加し、申し合わせ事項等の共通理解を図る			
○ 大会審判員としての自覚を持つこと。常に見られていることを忘れないこと			
◆試合前			
3)両レフェリー、TD が立ち合いのもとトスを実施			
3)メンバー表、登録証、(試合開始前の)公式記録用紙の確認			
4)ユニホームの確認(濃淡・デザインがはっきりしたもの:チーム同士、レフェリーウェアとチーム)			
4)チーム役員のウェアの確認(相手チームのコートプレイヤーと重複していないか)			
5)ウォーミングアップは、選手と共にペアで行う			
6)ゴールやゴールネット、ボールの点検(事前に)			
7)オフィシャルとの連携(業務の確認、得点、罰則、時間の管理について)			
◆試合開始前			
8)メンバーチェックを登録証とともに行う			
9)選手入場・挨拶の後、両チーム役員やオフィシャルと挨拶			
◆試合中			
得点の管理、時間の管理			
10)得点の管理は出来ているか(得点のたびに確認しているか)			
10)目視による公示時計の動作確認(どちらかが、試合開始時、タイムアウト時、再開時に)			
走法と位置取り			
11)基本的な立ち位置や動きを意識しているか			
11)コートレフェリー時:判定の後に素早くポイントに移動しているか			
11)ゴールレフェリーへの移動時:バックステップを用いることなく移動しているか			
12)7m スローの際のコートレフェリー:スロアーの利き腕側・GKを観察できる位置にいるか			
判定の手順、ゼスチャー			
13)①笛 ②方向指示 ③(必要に応じて)ゼスチャー の判定の手順を守っているか			
13)正しいゼスチャーを用いているか			
立ち居振る舞い			
14)ペアで同じ種類の笛を使用しているか			
14)笛を口にくわえたまま、プレーを観察していないか			
役割分担			
15)ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定しているか			
16)ピボットプレイヤーと防御プレイヤーの攻防を、ペアで連携し観察できているか			
15)、16)について、通信機器を有効に活用できているか			
競技規則の正しい理解			
17)警告や退場を判定する際、その理由をボディランゲージを用いて大きく示しているか			
18)差し違えた場合、必ず①タイムアウト ②ペアで協議 をしているか			
◆試合終了後			
19)両チーム役員やオフィシャルと挨拶			
19)公式記録用紙に正しく記入されているか確認後、サイン			
20)大会審判長や他のレフェリーへ助言を求める			
20)審判手帳に担当試合を記載し、審判長に捺印をお願いする			

令和 8 年度（2026 年度）D 級公認審判員の目標



D 級審判員は、公式試合（都道府県大会レベル）への参加資格が与えられる。公式試合を担当するためには、競技規則に従って試合を運営こと、および試合を運営するための基本となる技術を理解し、実践することが求められる。

また、競技規則の理解においては、競技規則試験において 6 割以上の正答率（C 級審判員認定に必要）が求められる。

以下に D 級審判員が公認審判員として理解し、実践すべき事項について記載する。

<試合前>

- 1) 遅くとも、試合開始時刻の 1 時間前までに会場に到着できるように移動する。
- 2) 大会本部に挨拶をし、控室にて更衣をするなど準備をする。
- 3) トスには指定された時間に両レフェリー、TD が立ち会う。メンバー表、登録証の確認を確実にを行う。また、試合開始直前に公式記録用紙に正しく記載されているかどうか確認する。
- 4) ユニホームの確認をする。判別し難いものは着用させない。チーム役員の服の色についても助言する。レフェリーウエアも判別し難い色は着用しない。
- 5) ウォーミングアップを選手と共にペアで行う。
- 6) ゴール、コートやボールの点検を行う。
- 7) オフィシャル席と業務の確認を行うこと（得点、罰則、時間の管理について）。

<試合開始時>

- 8) メンバーチェックを登録証とともに確認する。
- 9) 選手入場・挨拶の後、両チーム役員やオフィシャルと挨拶をする。

<試合中>

○ 得点の管理、時間の管理

- 10) 得点の管理は、掲示板が正しく表記されているかどうか得点のたびに厳密に行う。着地シユート等紛らわしい場合、得点が誤って追加されていないか確認する。
また、時間の管理は試合開始時、タイムアウト時、再開時にどちらか一方のレフェリーが公示時計を必ず目視し動作確認をする。

○ 走法と位置取り

- 1 1) CR と GR の基本的な立ち位置や動きを意識する。
CR は判定の後にポイントに素早く移動する。
GR への移動時、バックステップ走法は動きが遅く、非常に危険を伴うため用いない。
- 1 2) 7m スローの際、コートレフェリーはスローするプレイヤーの利き腕側に立ち、素早く移動し、シュートの軌道と GK の動きが正しく観察出来る位置をとる。

○ 判定の手順、ジェスチャー

- 1 3) 判定の手順を守る。
①笛 ②方向指示〔再開方法〕 ③(必要に応じ)ジェスチャー
競技規則に記載されているジェスチャーを用いる。

○ 立ち居振る舞い

- 1 4) 2人のレフェリーは、同じ種類の笛を使用する。長い時間、笛を口に入れたままにならないよう気を付ける。笛を口に入れたままで、プレーを観察することがないように。

○ 役割分担

- 1 5) ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定する。
- 1 6) ピボットプレイヤーの観察は、コートレフェリー、ゴールレフェリーで連携する。

○ 競技規則の正しい運用

- 1 7) 警告、退場を判定する際は、その理由をボディランゲージで大きく示す。
- 1 8) 指し違えたときは、必ずタイムアウトを取り 2 人で協議する。

<試合終了後>

- 1 9) 試合終了の挨拶（両チーム役員・オフィシャル）をして、公式記録用紙に正しく記載されているのを確認後サインする。
- 2 0) 大会審判長や他のレフェリーに助言を求める。
審判手帳に記載する。
審判長に捺印をお願いする。



＜ D 級公認審判員チェックリスト ＞

試合前、確認チェック☑	特に課題とする項目に○	終了後でできた項目☑
-------------	-------------	------------

◆試合前			
1)遅くとも、試合開始時刻の1時間前までに会場に到着			
2)会場に着いたら大会本部に挨拶し、控室にて準備(更衣、ストレッチなど)			
3)指定された時間に、両レフェリー、TO が立ち合いのもとトスを実施			
3)メンバー表、登録証、(試合開始前の)公式記録用紙の確認			
4)ユニホームの確認(濃淡・デザインがはっきりしたもの:チーム同士、レフェリーウェアとチーム)			
4)チーム役員のウェアの確認(相手チームのコートプレイヤーと重複していないか)			
5)ウォーミングアップは、選手と共にペアで行う			
6)ゴールやゴールネット、ボールの点検(事前に)			
7)オフィシャルとの連携(業務の確認、得点、罰則、時間の管理について)			
◆試合開始前			
8)メンバーチェックを登録証とともにを行う			
9)選手入場・挨拶の後、両チーム役員やオフィシャルと挨拶			
◆試合中			
得点の管理、時間の管理			
10)得点の管理は出来ているか(得点のたびに確認しているか)			
10)目視による公示時計の動作確認(どちらかが、試合開始時、タイムアウト時、再開時に)			
走法と位置取り			
11)基本的な立ち位置や動きを意識しているか			
11)コートレフェリー時:判定の後に素早くポイントに移動しているか			
11)ゴールレフェリーへの移動時:バックステップを用いることなく移動しているか			
12)7m スローの際のコートレフェリー:スロアーの利き腕側・GK を観察できる位置にいるか			
判定の手順、ゼスチャー			
13)①笛 ②方向指示 ③(必要に応じ)ゼスチャー の判定の手順を守っているか			
13)正しいゼスチャーを用いているか			
立ち居振る舞い			
14)ペアで同じ種類の笛を使用しているか			
14)笛を口にくわえたまま、プレーを観察していないか			
役割分担			
15)ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定しているか			
16)ピボットプレイヤーと防御プレイヤーの攻防を、ペアで連携し観察できているか			
15)、16)について、通信機器を有効に活用できているか			
競技規則の正しい理解			
17)警告や退場を判定する際、その理由をボディランゲージを用いて大きく示しているか			
18)差し違えた場合、必ず①タイムアウト ②ペアで協議 をしているか			
◆試合終了後			
19)両チーム役員やオフィシャルと挨拶			
19)公式記録用紙に正しく記入されているか確認後、サイン			
20)大会審判長や他のレフェリーへ助言を求める			
20)審判手帳に担当試合を記載し、審判長に捺印をお願いする			

公認審判員および公認テクニカルオフィシャル、公認審判指導員等に関する規程

第1節 総則

第1条【目的】

本規程は、公益財団法人日本ハンドボール協会（以下「本協会」という）に登録されたインドアハンドボール競技の審判員（以下「インドアハンドボール審判員」という）およびビーチハンドボール競技の審判員（以下「ビーチハンドボール審判員」という）並びにテクニカルオフィシャル、審判指導員（以下「審判インストラクター」という）の資格および地位に関する事項を定めることを目的とする。

第2条【本協会の権限】

本協会は、日本国内において行われるすべてのインドアハンドボール競技およびビーチハンドボール競技の公式試合（以下「公式試合」という）における審判、テクニカルオフィシャルに関する事項について決定する権限を持つ。

第3条【公式試合のインドアハンドボール審判員、ビーチハンドボール審判員、公認テクニカルオフィシャル、公認審判インストラクター】

1. 本協会に登録されたインドアハンドボール審判員またはビーチハンドボール審判員（以下「公認審判員」という）以外の者は、日本国内における一切の公式試合の審判活動を行うことはできない。ただし、本協会が認めた外国人審判員はこの限りではない。
2. 本協会に登録されたインドアハンドボールおよびビーチハンドボールテクニカルオフィシャル（以下「公認テクニカルオフィシャル」という）以外は、日本国内における一切の公式試合におけるテクニカルオフィシャル活動を行うことができない。ただし、本協会が招聘した外国人テクニカルオフィシャルはこの限りではない。なお、公式試合には最低 1 名の公認テクニカルオフィシャルの配置を原則とするが、大会によって各試合に有資格者を配置することが困難な場合、主催者の判断で、会場内に必要に応じて指導助言ができる有資格者を少なくとも 1 名配置することで、競技を運営することができる。
3. 本協会に登録されたインドアハンドボールおよびビーチハンドボール審判インストラクター（以下「公認審判インストラクター」という）以外の者は、日本国内における一切の公式試合においての審判員の指導をすることはできない。ただし、本協会が認めた外国人審判インストラクターはこの限りではない。

第2節 公認審判員の資格

第4条【資格の種類】

公認審判員の資格は、次の 8 種類とする。

- (1) 国際審判員（インドア・ビーチ共通）
- (2) A 級審判員
- (3) B 級審判員
- (4) C 級審判員
- (5) D 級審判員
- (6) ビーチハンドボール A 級審判員（兼ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル）
- (7) ビーチハンドボール B 級審判員（兼ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル）
- (8) 終身審判員（兼審判インストラクター）（インドア・ビーチ共通）

第5条【技能の区分】

1. 国際審判員は、国際ハンドボール連盟またはアジアハンドボール連盟において、登録されている審判員もしくは登録されていた審判員に与えられる資格である。
2. A 級審判員は、本協会が主催等する国際競技を含めたインドアハンドボール競技の試合（以下「公式競技会」という）の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
3. B 級審判員は、本協会が主催等する国際競技を除く公式競技会の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
4. C 級審判員は、ブロック協会が主催する公式競技会の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
5. D 級審判員は、都道府県協会もしくは都道府県協会を構成する支部および地区/市区郡町村協会の傘下の団体、連盟等が主催する公式競技会の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
6. ビーチハンドボール A 級審判員（兼ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル。以下「ビーチハンドボール A 級審判員」）は、本協会が主催等する国際競技を含めたビーチハンドボール競技の試合（以下「ビーチハンドの公式競技会」という）の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
7. ビーチハンドボール B 級審判員（兼ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル。以下「ビーチハンドボール B 級審判員」）は、本協会が主催等する国際競技を除くビーチハンドの公式競技会の審判を行う技能を有する者に与えられる資格である。
8. 終身審判員は、競技の発展と審判技術の向上のために、後進の指導や大会の管理などの任にあたることを目的として、インドアハンドボールでは国際、A、B 級を取得していた者、ビーチハンドボールでは国際、A 級を取得していた者に与えられる資格である。

第6条【資格の認定】

1. 公認審判員の資格は、満 16 歳以上とする。登録を継続する限り定年は設けない。ただし終身・国際・A 級・B 級の公認審判員について、全日本大会の審判担当は、満 55 歳の誕生日を迎えた年度の 3 月 31 日までとする。
2. 国際審判員の資格は、国際ハンドボール連盟およびアジアハンドボール連盟によって行われる国際審判員審査会において、適格と認められた者に対して認定する。
3. A 級審判員の資格は、B 級審判員のうちから、本協会が主催する A 級審判員審査会において、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
4. B 級審判員の資格は、C 級審判員のうちから、本協会が主催する B 級審判員審査会において、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
5. C 級審判員の資格は、D 級審判員のうちから各ブロック協会が主催する C 級審判員審査会において、適格と認められた者に対してブロック協会が認定する。
6. D 級審判員の資格は、本人の申請を受け、各都道府県ハンドボール協会審判委員会（以下「各都道府県審判委員会」という）が審査し認定する。
7. ビーチハンドボール A 級審判員の資格は、ビーチハンドボール B 級審判員のうちから、本協会が主催する A 級審判員審査会（兼ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル審査会）において、適格と認められた者に対してビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルの資格と併せて本協会が認定する。
8. ビーチハンドボール B 級審判員の資格は、本協会が主催するビーチハンドボール B 級審判員審判研修会（兼ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル研修会）を受講し、適格と認められた者に対してビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャルの資格と併せて本協会が認定する。
9. 公認審判員の認定審査基準は、本協会審判本部が定める。

10. 第 3 項、第 4 項、第 5 項、第 6 項、第 7 項および第 8 項の規程にかかわらず、本協会は、A 級、B 級、C 級および D 級審判員、ビーチハンドボール A 級およびビーチハンドボール B 級審判員の資格認定を行うことができる。
11. 前各項の規程にかかわらず、本協会は、外国で審判員資格を取得した者については、その技能により適切な公認審判員の資格を適宜認定することができる。
12. 終身審判員の資格は、インドアハンドボールでは国際・A 級・B 級、ビーチハンドボールでは国際、A 級を取得して満 50 歳を迎えた年の翌年度以降、各都道府県審判委員会から適格と認められた者に対して現保有級に相当する公認審判インストラクターの資格と併せて本協会が認定する。

第 7 条【上級認定の要件】

公認審判員が、上級の公認審判員の資格を申請し認定されるためには、次の要件が満たされていないなければならない。

- (1) A 級審判員の認定には、審査時において B 級審判員資格を取得してから満 2 年を経ているなければならない（申請時には満 2 年を経ているなくてもよい。以下、本条において同じ）、B 級審判員資格を取得してから 50 試合以上の公式試合を担当し、さらに全日本大会もしくは 10 試合以上のブロック大会を経験していなければならない。
- (2) B 級審判員の認定には、審査時において C 級審判員資格を取得してから満 2 年を経ているなければならない、C 級を取得してから 30 試合以上の公式試合の審判を担当し、さらにブロック大会を経験していなければならない。
- (3) C 級審判員の認定には、審査時において D 級審判員資格を取得してから満 1 年を経ているなければならない（申請時に満 1 年を経ているなくてもよい）。
- (4) ビーチハンドボール A 級審判員の認定には、審査時においてビーチハンドボール B 級審判員を取得してから満 2 年を経ているなければならない、ビーチハンドボール B 級を取得してから公式試合の担当をしていなければならない。

第 8 条【上級申請・新規申請に関する諸手続・費用】

公認審判員の上級申請および D 級審判員並びに終身審判員の新規申請に関する諸手続を、以下に定める。費用に関しては、別表に定める額とする。

- (1) A 級審判員を申請するインドアハンドボール審判員は、公認審判員手帳（以下「手帳」という）および所定の公認 A 級審判員申請書を各都道府県審判委員会に提出し、審査料を納入する。各都道府県審判委員会は、提出された手帳と公認 A 級審判員申請書の記入内容を確認し、押印の上、各ブロック審判長に提出する。各ブロック審判長は、審査料が納入されていることおよび提出された手帳と公認 A 級審判員申請書の記入内容を確認し、各ブロック審判長の推薦書をそえて本協会に申請する。申請の時期は毎年 11 月 1 日から 12 月 25 日までとする。
- (2) B 級審判員を申請するインドアハンドボール審判員は、所定の手帳と公認 B 級審判員申請書を各都道府県審判委員会に提出し、審査料を納入する。各都道府県審判委員会は、提出された手帳と公認 B 級審判員申請書の記入内容を確認し、押印の上、各ブロック審判長に提出する。各ブロック審判長は、審査料が納入されていることおよび提出された手帳と公認 B 級審判員申請書の記入内容を確認し、各ブロック審判長の推薦書をそえて本協会に申請する。申請の時期は毎年 11 月 1 日から 12 月 25 日までとする。
- (3) C 級審判員を申請するインドアハンドボール審判員は、所定の手帳と公認 C 級審判員申請書を各都道府県審判委員会に提出し、審査料を納入する。各都道府県審判委員会は、提出された手帳と公認 C 級審判員申請書の記入内容を確認し、押印の上、各ブロック審判長に申請する。各ブロック審判長は、審査料が納入されていることおよび提出された手帳と公認 C 級審判員申請書の記入内容を確認する。申請の時期は毎年 4 月 1 日から 5 月 31 日までとする。

(4) D 級審判員を申請するインドハンドボール審判員は、所定の公認 D 級審判員申請書に、審査料、認定料等をそえて各都道府県審判委員会に申請する。各都道府県審判委員会は、申請者の審査料および認定料の入金を確認し、公認審判員認定者名簿 (D 級用) を 1 部作成して本協会に報告する。

本協会は、公認審判員認定者名簿 (D 級用) に審判登録番号を記入し、コイン、ワッペン、公認審判員手帳および罰則カード (イエロー、レッド、ブルー) とともに各都道府県審判委員会へ送付する。

各都道府県審判委員会は、各審判員に審判登録番号を知らせるとともに、コイン、ワッペン、公認審判員手帳および罰則カード (イエロー、レッド、ブルー) を配布することによって公認審判員として本協会に登録されたことを通知するものとする。

(5) ビーチハンドボール A 級審判員を申請するビーチハンドボール審判員は、所定の公認ビーチハンドボール A 級審判員申請書 (兼公認ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル申請書) および手帳を本協会に提出し、審査料を納入する。本協会は、審査料が納入されていることおよび提出された手帳と公認ビーチハンドボール A 級審判員申請書 (兼公認ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル申請書) の記入内容を確認し、審査を行う。申請の時期は別途本協会が定める。

(6) ビーチハンドボール B 級審判員を申請するビーチハンドボール審判員は、審査料、認定料等をそえて本協会に申請する。

ビーチハンドボールにおいて、新規ビーチハンドボール B 級審判員として登録する者は、新規 B 級ビーチハンドボールテクニカルオフィシャルと併せて登録とする。本協会は、申請者の審査料および認定料が納入されていることを確認し、公認ビーチハンドボール B 級審判員 (兼ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル) 認定者名簿を作成し、所属する各都道府県協会に報告する。

(7) 終身審判員を申請する公認審判員は、所定の終身審判員申請用紙に記入の上、各都道府県審判委員会に提出し、認定料等を納入する。各都道府県審判委員会は、認定料が納入されていることおよび終身審判員申請用紙の内容を確認、推薦印を押印の上、本協会に申請する。申請の期間は、毎年 4 月 1 日から 4 月 30 日までとする。

終身審判員として登録する者は、現保有級に相当する公認審判インストラクターの資格と併せて登録とする。ビーチハンドボール終身審判員となる者は、現保有級に相当する公認テクニカルオフィシャルの資格も併せての登録とする。

登録者には、終身審判員章 (金バッジ) を贈り、終身審判員名簿にその名を記録する。

第 9 条【上級審査と認定、登録】

1. 各級公認審判員の審査は年 1 回とする。
2. A 級審判員・B 級審判員およびビーチハンドボール A 級審判員の審査は、本協会が定める会場において、書類審査、実技試験、筆記試験、体力試験等によって行う。
3. 第 2 項の審査に合格した公認審判員は、認定料を指定された期日までに本協会に納入する。認定料は別表に定める額とする。本協会は、A 級審判員・B 級審判員およびビーチハンドボール A 級審判員として登録する。
4. C 級審判員の審査は、各都道府県審判委員会より提出された書類と筆記試験等の審査を、各ブロック審判長が行う。手帳に必要事項を記入・押印し、各都道府県審判委員会へ返送することにより、C 級審判員として認定されたことを通知する。C 級審判員として認定されたインドハンドボール審判員は、認定料を指定された期日までに本協会に納入する。認定料は別表に定める額とする。
5. 第 4 項の審査に合格した公認審判員について各ブロック審判長は、公認審判員認定者名簿 (C 級用) を 1 部作成し、本協会に毎年 5 月 31 日までに報告する。本協会は、公認 C 級審判員として登録する。

第 10 条 【資格の有効期間】

公認審判員の認定後の有効期間は、次の通りとする。なお、年度とは、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までの期間をいう。

- (1) 資格を新規に認定された者は、認定日から当該年度末日(3 月 31 日)までとする。
- (2) 資格を新規に認定された者は、認定日を以下の通り定める。
 - ア 上級審判員審査会が 9 月末日までに行われた場合、認定日は当該年度の 4 月 1 日とする。
 - イ 上級審判員審査会が 10 月 1 日以降に行われた場合、認定日は翌年度の 4 月 1 日とする。
 - ウ D 級審判員およびビーチハンドボール B 級の認定日は、登録年度の 4 月 1 日とする。
- (3) 資格の更新があった者は、4 月 1 日から当該年度末日(3 月 31 日)までとする。

第 11 条 【資格認定における除外理由】

本協会は、公認審判員としての活動の遂行に支障があると認められる者に対し、公認審判員資格を認定することはできない。

第 3 節 公認審判員の登録

第 12 条 【資格の新規申請に関する諸手続き】

1. 新たに公認審判員として活動を希望する者は、以下の手続きを経て登録される。
 - (1) 所属する都道府県協会を決定する。
 - (2) インドアハンドボールについては、所属する各都道府県審判委員会が第 6 条に基づいて指示する手続きに従って申請し、認められる。
 - (3) ビーチハンドボールについては、本協会が第 6 条に基づいて実施する研修会を受講し、認められる。
 - (4) 本協会および都道府県協会が定める審査料および認定料を納付する。審査料および認定料は別表に定める額とする。
2. 本協会は、前項で登録された公認審判員に対して、公認審判員登録証を発行する。

第 13 条 【資格の更新登録】

1. 公認審判員の資格の更新登録は、以下の通りとする。
 - (1) 公認審判員が翌年度にその資格の更新登録を希望する場合、本協会が認める審判講習会または研修会を受講し、適格と認定され、かつ本協会および所属する都道府県協会が定めた期日までに登録料を支払わなければならない。
 - (2) 更新登録は、継続して行われなければならない。更新登録を行わない場合には、公認審判員の資格を失う。
2. 本協会は、前項(1)で資格更新と認定された公認審判員に対して、公認審判員登録証を発行する。
3. 本協会は、第 1 項(1)で資格更新と認定されたビーチハンドボール審判員に対して、ビーチテクニカルオフィシャルとしても資格の更新を認定する。

第 14 条 【登録料】

1. 公認審判員は、本協会が定める登録料を納付しなければならない。
2. 本協会への登録料は、毎年 1 年分を納付するものとする。
3. 本協会登録料の金額は、別表に定める額とする。
4. 資格を更新する公認審判員の年齢は、更新手続きを行う年度開始日の前日(3 月 31 日現在)の年齢とする。

第 15 条【届出】

公認審判員は、届出済の公認審判員情報に変更を生じた場合、可及的速やかに所定の手続きにより変更しなければならない。

第 16 条【所属の変更】

公認審判員は、主たる審判活動の場を所属している都道府県協会から他の都道府県協会に変更する場合、変更を希望する都道府県協会に確認した上で「所属協会変更届」を申請し、変更前の都道府県協会と変更後の都道府県協会の承認を得なければならない。

第 17 条【休止・再開】

公認審判員は、長期で海外勤務をするために日本で審判活動ができない、もしくは、長期の病気、怪我の治療又は妊娠などのために審判活動ができないなど、やむを得ない理由がある場合に限り休止を申請することができる。

なお、休止した公認審判員が活動を再開する場合、当該公認審判員は、休止前に所属していた都道府県協会に復活を申請し、所定の講習会、研修会等に出席する必要がある。復活の際に所属する都道府県協会が変更となる場合、第 16 条に従い「所属協会変更届」も提出すること。

第 4 節 公認審判員の義務

第 18 条【遵守義務】

公認審判員は、次の事項を遵守しなければならない。

- (1) 法令および本協会の各種規程・規則を遵守すること。
- (2) 競技規則等を正しく理解し、常に公平公正な判定を行い、日本のハンドボール発展に貢献すること。
- (3) 所定の講習会、研修会等に参加し、審判技能の向上に努めるとともに、公認審判員としての自覚と責任をもって行動すること。
- (4) 試合に関して不正行為又は操作を疑われることのないよう自らを厳しく律すること。
- (5) 差別および暴力の根絶に向けた努力を継続すること。
- (6) 暴力団など反社会的勢力とは一切関係をもたないこと。
- (7) 暴力団など反社会的勢力との取引およびあらゆる不当要求を拒否すること。

第 19 条【服装等】

公認審判員の活動時の服装は、シャツ・ショーツおよびソックスのいずれも黒色であることを基本とする。ただし、シャツについては他の色のものを着用することも認める。いずれの場合も、競技者の服装と明確に区別できる色で、かつ当該試合を担当する審判員の服装が統一されていることを原則とする。

第 20 条【全日本大会審判員の服装】

公認審判員が、全日本大会の審判員として活動する場合は、会議等の出席も含め、主催者が指定する服装を着用しなければならない。

第5節 公認審判員の育成

第21条【公認審判講習会】

公認審判員は、級ごとに設定される本協会または各ブロック協会・各都道府県協会・各連盟が主催する審判講習会または研修会に、年1回以上出席しなければならない。

第6節 公認審判員の資格適格性の再審査および指導

第22条【公認審判員の資格適格性の再審査および指導】

1. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、次の各号に該当する場合、公認審判員の資格適格性に対する再審査を行うことができる。
 - (1) 第5条に規定する技能を有すると認められない場合。
 - (2) 第18条に違反した場合。
 - (3) 第59条に定める機関において懲罰が科せられた場合。
 - (4) その他、公認審判員の資格適格性に疑義が生じた場合。
2. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、公認審判員の資格適格性に対する再審査の結果、必要があると判断した場合、公認審判員へ次の指導を行うことができる。
 - (1) 注意（口頭による注意）。
 - (2) 嚴重注意（文書による注意）。
 - (3) 公認審判員資格の停止（一定期間の公認審判員資格の停止）。
 - (4) 公認審判員資格の降級（下位の公認審判員資格への変更）。
 - (5) 公認審判員資格の失効（失効後にインドアハンドボールD級審判員又はビーチハンドボールB級審判員に再度申請することは妨げられない）。
 - (6) 本項（1）から（5）の項目に代えて又は併せて、一定期間の社会奉仕活動への従事、書面等による反省文の提出その他必要な指導。

第7節 公認テクニカルオフィシャルの資格

第23条【資格の種類】

公認テクニカルオフィシャルの資格は、次の6種類とする。

- (1) S級テクニカルオフィシャル
- (2) A級テクニカルオフィシャル
- (3) B級テクニカルオフィシャル
- (4) ビーチハンドボールS級テクニカルオフィシャル
- (5) ビーチハンドボールA級テクニカルオフィシャル
（兼ビーチハンドボール国際審判員または兼ビーチハンドボールA級審判員）
- (6) ビーチハンドボールB級テクニカルオフィシャル（兼ビーチハンドボールB級審判員）

第24条【技能の区分】

1. S級テクニカルオフィシャルの資格は、国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟主催大会の公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。
2. A級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会が主催等する国際競技を含めた公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。
3. B級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会が主催等する国際競技を除く公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。

4. ビーチハンドボール S 級テクニカルオフィシャルの資格は、国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟主催大会の公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。
5. ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル（兼ビーチハンドボール A 級審判員。以下「ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル」）の資格は、本協会が主催等する国際競技を含めた公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。
6. ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル（兼ビーチハンドボール B 級審判員。以下「ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル」）の資格は、本協会が主催等する国際競技を除く公式競技会を担当する技能を有する者に与えられる資格である。

第 25 条【資格の認定】

1. 公認テクニカルオフィシャルの資格は、満 16 歳以上とする。登録を継続する限り定年は設けない。ただし全日本大会のテクニカルオフィシャルの担当は、満 70 歳の誕生日を迎えた年度の 3 月 31 日までとする。
2. S 級テクニカルオフィシャルの資格は、国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟主催大会の試合にテクニカルオフィシャルとして参加した者、もしくは国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟が主催する研修会等を受講し、適格と認められた者に対して認定する。
3. A 級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会主催の A 級テクニカルオフィシャル審査会に参加して、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
4. B 級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会主催の B 級テクニカルオフィシャル研修会に参加して、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
5. ビーチハンドボール S 級テクニカルオフィシャルの資格は、国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟主催大会の試合にテクニカルオフィシャルとして参加した者、もしくは国際ハンドボール連盟又はアジアハンドボール連盟が主催する研修会等を受講し、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
6. ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会主催のビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル審査会（兼ビーチハンドボール A 級審判員審査会）に参加して、適格と認められた者に対してビーチ A 級審判員の資格と併せて本協会が認定する。
7. ビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャルの資格は、本協会主催のビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル研修会（兼ビーチハンドボール B 級審判員研修会）に参加して、適格と認められた者に対してビーチ B 級審判員の資格と併せて本協会が認定する。
8. 公認テクニカルオフィシャルの認定審査基準は、本協会審判本部が定める。
9. 第 3 項および第 6 項の規定にかかわらず、本協会はインドアハンドボール A 級およびビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルの資格認定を行うことができる。
10. 前各項の規程にかかわらず、本協会は、外国でテクニカルオフィシャル資格を取得した者については、その技能により適切な公認テクニカルオフィシャルの資格を適宜認定することができる。

第 26 条【上級認定の要件】

公認テクニカルオフィシャルが、上級の公認テクニカルオフィシャルの資格を申請し認定されるためには、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) A 級テクニカルオフィシャルの認定には、審査時において B 級テクニカルオフィシャル資格を取得してから満 2 年を経ている必要はなく（申請時には満 2 年を経ている必要もなし。以下、本条において同じ）、B 級テクニカルオフィシャル資格を取得してから、全日本大会もしくは 10 試合以上のブロック大会を経験していなければならない。
- (2) ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルの認定には、審査時においてビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャル資格を取得してから満 2 年を経ている必要はなく、ビー

チハンドボール B 級テクニカルオフィシャル資格を取得してから、全日本大会もしくは 10 試合以上の公式試合を経験していなければならない。

第 27 条【上級申請に関する諸手続・費用】

公認テクニカルオフィシャルの上級申請に関する諸手続を、以下に定める。費用に関しては、別表に定める額とする。

- (1) A 級を申請する公認テクニカルオフィシャルは、所定の公認 A 級テクニカルオフィシャル申請書を本協会に提出し、審査料を納入する。本協会は、審査料が納入されていることおよび提出された公認 A 級テクニカルオフィシャル申請書を確認する。申請の時期は別途本協会が定める。
- (2) ビーチハンドボール A 級を申請する公認ビーチハンドボールテクニカルオフィシャルは、所定の公認ビーチハンドボール A 級審判員申請書兼公認ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル申請書を本協会に提出し、審査料を納入する。本協会は、審査料が納入されていることおよび提出された公認ビーチハンドボール A 級審判員申請書兼公認ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャル申請書を確認する。申請の時期は別途本協会が定める。

第 28 条【上級審査と認定、登録】

1. A 級テクニカルオフィシャルおよびビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルの審査は、本協会が定める会場等において、書類審査、実技試験、筆記試験等によって行う。
2. 前項の審査に合格したテクニカルオフィシャルに対し、本協会は、A 級テクニカルオフィシャルとして登録する。認定料は必要としない。
3. 第 1 項の審査に合格したビーチハンドボールテクニカルオフィシャルに対し、本協会は、ビーチハンドボール A 級テクニカルオフィシャルとして登録する。認定料は別表に定める額とする。

第 29 条【資格の有効期間】

公認テクニカルオフィシャルの認定後の有効期間は、次の通りとする。なお、年度とは、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までの期間をいう。

- (1) 資格を新規に認定された者は、認定日から当該年度末日(3 月 31 日)までとする。
- (2) 資格を新規に認定された者は、認定日を以下の通り定める。
 - ア S 級テクニカルオフィシャルおよびビーチハンドボール S 級テクニカルオフィシャルの認定日は、登録年度の 4 月 1 日とする。
 - イ A 級テクニカルオフィシャル審査会が 9 月末日までに行われた場合、認定日は当該年度の 4 月 1 日とする。
 - ウ A 級テクニカルオフィシャル審査会が 10 月 1 日以降に行われた場合、認定日は翌年度の 4 月 1 日とする。
 - エ B 級テクニカルオフィシャルおよびビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャルの認定日は、登録年度の 4 月 1 日とする。
- (3) 資格の更新があった者は、4 月 1 日から当該年度末日(3 月 31 日)までとする。

第 30 条【資格認定における除外理由】

本協会は、公認テクニカルオフィシャルとしての活動の遂行に支障があると認められる者に対し、公認テクニカルオフィシャル資格を認定することはできない。

第 31 条【定年】

公認テクニカルオフィシャルの定年は、次の通りとする。

- (1) S 級テクニカルオフィシャルおよびビーチハンドボール S 級テクニカルオフィシャルは、満 65 歳の誕生日を迎えた年度の 3 月 31 日までとする。

- (2) 本項(1)で活動の継続を希望する者は、A級テクニカルオフィシャルおよびビーチハンドボールA級テクニカルオフィシャルとしての活動を認める。
- (3) 公認テクニカルオフィシャルは、満70歳の誕生日を迎えた年度の3月31日をもって、全日本大会担当を終了する。

第8節 公認テクニカルオフィシャルの登録

第32条【資格の新規申請に関する諸手続き】

1. 新たに公認テクニカルオフィシャルとして活動を希望する者は、以下の手続きを経て登録される。
 - (1) 所属する都道府県協会を決定する。
 - (2) インドアハンドボールについては、本協会に申請の上、第25条に基づいて実施される研修会を受講し、認められる。
 - (3) ビーチハンドボールについては、本協会に申請の上、第25条に基づいて実施される研修会を受講し、認められる。
 - (4) インドアハンドボールについては、本協会が定める認定料を納付する。認定料は別表に定める額とし、審査料も含めての金額とする。
 - (5) ビーチハンドボールについては、本協会が定める認定料を納付する。審査料および認定料は、別表に定める額とする。
2. 本協会は、前項で登録された公認テクニカルオフィシャルに対して、公認テクニカルオフィシャル登録証を発行する。

第33条【資格の更新登録】

公認テクニカルオフィシャルの資格の更新登録は、以下の通りとする。

- (1) 公認テクニカルオフィシャルが翌年度にその資格の更新登録を希望する場合、本協会が認める講習会または研修会を受講し、適格と認定され、かつ本協会および所属する都道府県協会が定めた期日までに登録料を支払わなければならない。
- (2) 本協会は、本項(1)で資格更新を認定された公認テクニカルオフィシャルに対し、公認テクニカルオフィシャル登録証を発行する。
- (3) 本協会は、本項(1)で資格更新と認定された公認ビーチハンドボールテクニカルオフィシャルに対して、公認ビーチ審判員としても資格の更新を認定する。

第34条【登録料】

1. 公認テクニカルオフィシャルは、本協会が定める登録料を納付しなければならない。
2. 本協会への登録料は、毎年1年分を納付するものとする。
3. 本協会登録料の金額は、別表に定める額とする。
4. 資格を更新する公認テクニカルオフィシャルの年齢は、更新手続きを行う年度開始日の前日(3月31日現在)の年齢とする。

第35条【届出】

公認テクニカルオフィシャルは、届出済の公認テクニカルオフィシャル情報に変更を生じた場合、可及的速やかに所定の手続きにより変更しなければならない。

第 36 条【所属の変更】

公認テクニカルオフィシャルは、主たる活動の場を所属している都道府県協会から他の都道府県協会に変更する場合、変更を希望する都道府県協会に確認した上で「所属協会変更届」を申請し、変更前の都道府県協会と変更後の都道府県協会の承認を得なければならない。

第 37 条【休止・再開】

公認テクニカルオフィシャルは、長期で海外勤務をするために日本で活動ができない、もしくは、長期の病気、怪我の治療又は妊娠などのために活動ができないなど、やむを得ない理由がある場合に限り休止を申請することができる。

なお、休止した公認テクニカルオフィシャルが活動を再開する場合には、当該公認テクニカルオフィシャルは、休止前に所属していた都道府県協会に復活を申請し、所定の講習会、研修会等に出席する必要がある。復活の際に所属する都道府県協会が変更となる場合、第 36 条に従い「所属協会変更届」も提出すること。

第 9 節 公認テクニカルオフィシャルの義務

第 38 条【遵守義務】

公認テクニカルオフィシャルは、次の事項を遵守しなければならない。

- (1) 法令および本協会の各種規程・規則を遵守すること。
- (2) 競技規則等を正しく理解し、常に公平公正な立場で、日本のハンドボール発展に貢献すること。
- (3) 所定の講習会、研修会等に参加し、技能の向上に努めるとともに、公認テクニカルオフィシャルとしての自覚と責任をもって行動すること。
- (4) 試合に関して不正行為又は操作を疑われることのないよう自らを厳しく律すること。
- (5) 差別および暴力の根絶に向けた努力を継続すること。
- (6) 暴力団など反社会的勢力とは一切関係をもたないこと。
- (7) 暴力団など反社会的勢力との取引およびあらゆる不当要求を拒否すること。

第 39 条【服装等】

公認テクニカルオフィシャルは、活動時には主催者が指定する服装を着用しなければならない。当該試合を担当する公認テクニカルオフィシャルの服装が、統一されていることを原則とする。

第 40 条【全日本大会テクニカルオフィシャルの服装】

公認テクニカルオフィシャルが全日本大会のテクニカルオフィシャルとして活動する場合、会議等の出席も含め、主催者が指定する服装を着用しなければならない。

第 10 節 公認テクニカルオフィシャルの育成

第 41 条【公認テクニカルオフィシャル講習会】

公認テクニカルオフィシャルは、本協会または各ブロック協会・各都道府県協会・各連盟が主催する講習会または研修会に年 1 回以上出席しなければならない。

第 11 節 公認テクニカルオフィシャルの資格適格性の再審査および指導

第 42 条【公認テクニカルオフィシャルの資格適格性の再審査および指導】

1. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、次の各号に該当する場合、公認テクニカルオフィシャルの資格適格性に対する再審査を行うことができる。
 - (1) 第 24 条に規定する技能を有すると認められない場合。
 - (2) 第 38 条に違反した場合。
 - (3) 第 59 条に定める機関において懲罰が科せられた場合。
 - (4) その他、公認テクニカルオフィシャルの資格適格性に疑義が生じた場合。
2. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、公認テクニカルオフィシャルの資格適格性に対する再審査の結果、必要があると判断した場合、公認テクニカルオフィシャルへ次の指導を行うことができる。
 - (1) 注意（口頭による注意）。
 - (2) 嚴重注意（文書による注意）。
 - (3) 公認テクニカルオフィシャル資格の停止（一定期間の公認テクニカルオフィシャル資格の停止）。
 - (4) 公認テクニカルオフィシャル資格の降級（下位の公認テクニカルオフィシャル資格への変更）。
 - (5) 公認テクニカルオフィシャル資格の失効（失効後にインドアハンドボール B 級又はビーチハンドボール B 級テクニカルオフィシャルに再度申請することは妨げられない）。
 - (6) 本項（1）から（5）の項目に代えて又は併せて、一定期間の社会奉仕活動への従事、書面等による反省文の提出その他必要な指導。

第 12 節 公認審判インストラクターの資格

第 43 条【資格の種類】

公認審判インストラクターの資格は、次の 6 種類である。

- (1) S 級審判インストラクター
- (2) A 級審判インストラクター
- (3) B 級審判インストラクター
- (4) C 級審判インストラクター
- (5) ビーチハンドボール S 級審判インストラクター
- (6) ビーチハンドボール A 級審判インストラクター

第 44 条【技能の区分】

1. S 級審判インストラクターは、A 級以下のインドアハンドボール審判インストラクター並びにすべてのインドアハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。
2. A 級審判インストラクターは、B 級以下のインドアハンドボール審判インストラクター並びに A 級以下のインドアハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。
3. B 級審判インストラクターは、C 級以下のインドアハンドボール審判インストラクター並びに B 級以下のインドアハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。

4. C 級審判インストラクターは、C 級以下のインドアハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。
5. インドアハンドボールにおいて、各ブロック協会や都道府県協会もしくは都道府県協会を構成する支部および地区/市区郡町村協会の傘下の団体、連盟等の審判長並びに副審判長、その他審判長が指名するインドアハンドボール審判インストラクターの資格保有者は、インドアハンドボールに関わる全ての公認審判インストラクター並びに公認審判員の指導、評価および認定審査を務めることができる。
6. インドアハンドボールにおいて、各ブロック協会や都道府県協会もしくは都道府県協会を構成する支部および地区/市区郡町村協会の傘下の団体、連盟等が主催する公式試合の審判長並びに副審判長、その他審判長が指名する審判インストラクター資格保有者は、参加する公式競技会または公式試合において、全ての公認審判インストラクター並びに公認審判員の指導、評価および認定審査を務めることができる。
7. ビーチハンドボール S 級審判インストラクターは、A 級以下のビーチハンドボール審判インストラクター並びにすべてのビーチハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。
8. ビーチハンドボール A 級審判インストラクターは、A 級以下のビーチハンドボール審判員の指導、評価および認定審査を務める技能を有する者に与えられる資格である。
9. ビーチハンドボールにおいて、各ブロック協会や都道府県協会もしくは都道府県協会を構成する支部および地区/市区郡町村協会の傘下の団体、連盟等の審判長並びに副審判長、その他審判長が指名するビーチハンドボール審判インストラクターの資格保有者は、ビーチハンドボールに関わる全ての公認審判インストラクター並びに公認審判員の指導、評価および認定審査を務めることができる。
10. ビーチハンドボールにおいて、各ブロック協会や都道府県協会もしくは都道府県協会を構成する支部および地区/市区郡町村協会の傘下の団体、連盟等が主催する公式試合の審判長並びに副審判長、その他審判長が指名する審判インストラクター資格保有者は、参加する公式競技会または公式試合において、全ての公認審判インストラクター並びに公認審判員の指導、評価および認定審査を務めることができる。

第 45 条 【資格の認定】

1. S 級審判インストラクターの資格は、A 級審判インストラクターの中から本協会主催の S 級インストラクター認定審査会に参加して、適格と認められた者に対して本協会が認定する。
2. A 級および B 級審判インストラクターの資格は、それぞれ本協会主催の A 級および B 級審判インストラクター認定審査会に参加して、適格と認められた者に対して本協会が認定する。A 級審判インストラクター資格は国際および A 級審判員資格取得者もしくは資格を取得していた者、B 級審判インストラクター資格は B 級審判員資格取得者もしくは資格を取得していた者に与えられる。
3. C 級審判インストラクターの資格は、本協会主催の C 級審判インストラクター認定審査会に参加して、適格と認められた者に対してブロック協会が認定する。C 級審判インストラクター資格は C 級審判員資格取得者もしくは資格を取得していた者に与えられる。
4. ビーチハンドボール S 級および A 級審判インストラクターの資格は、それぞれ本協会主催のビーチハンドボール S 級および A 級審判インストラクター認定審査会に参加して、適格と認められた者に対して本協会が認定する。ビーチハンドボール A 級審判インストラクター資格は、国際およびビーチハンドボール A 級審判員資格取得者もしくは資格を取得していた者に与えられる。
5. 終身審判員として適格と認められた者は、現保有級に相当する審判インストラクター資格も併せて認定する。
6. 公認審判インストラクターの認定審査基準は、本協会審判本部が定める。

7. 第 2 項、第 3 項および第 4 項の規定にかかわらず、本協会は、A 級、B 級の審判インストラクターおよび A 級のビーチハンドボール審判インストラクターの資格認定を行うことができる。
8. 前各項の規定にかかわらず、本協会は、外国で審判インストラクター等の資格を取得した者については、その技能により適切な級の公認審判インストラクターの資格を、適宜認定することができる。

第 46 条【資格の有効期間】

公認審判インストラクターの認定後の有効期間は、次の通りとする。なお、年度とは、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までの期間をいう。

- (1) 資格を新規に認定された者は、認定日から当該年度末日(3 月 31 日)までとする。
- (2) 資格の更新があった者は、4 月 1 日から当該年度末日(3 月 31 日まで)とする。

第 47 条【資格認定における除外理由】

本協会は、公認審判インストラクターとしての活動の遂行に支障があると認められる者に対し、公認審判インストラクター資格を認定することはできない。

第 48 条【定年】

各級の公認審判インストラクターの定年は、次の通りとする。

- (1) S 級審判インストラクターおよびビーチハンドボール S 級審判インストラクターは、満 65 歳の誕生日を迎えた年度の 3 月 31 日をもって定年とする。
- (2) 本項 (1) で活動の継続を希望する者は、A 級審判インストラクターおよびビーチハンドボール A 級審判インストラクターとしての活動を認める。
- (3) A 級、B 級、C 級審判インストラクターおよびビーチハンドボール A 級審判インストラクターは、満 70 歳の誕生日を迎えた年度の 3 月 31 日をもって定年とする。

第 13 節 公認審判インストラクターの登録

第 49 条【資格の新規申請に関する諸手続き】

1. 新たに公認審判インストラクターとして活動を希望する者は、以下の手続きを経て登録される。
 - (1) 所属する都道府県協会を決定する。
 - (2) 新たに公認インドハンドボール審判インストラクターとして活動を希望する者は、本協会に申請の上、第 45 条に基づいて本協会が実施する認定審査会を受講し、適格と認められる。
 - (3) 新たに公認ビーチハンドボール審判インストラクターとして活動を希望する者は、本協会に申請の上、第 45 条に基づいて本協会が実施する認定審査会を受講し、適格と認められる。
 - (4) 本協会が定める登録料を納付する。登録料は別表に定める額とする。
2. 本協会は、前項で登録された公認審判インストラクターに対して、公認審判インストラクター登録証を発行する。

第 50 条【資格の更新登録】

公認審判インストラクターの資格の更新登録は、以下の通りとする。

- (1) 公認審判インストラクターが翌年度にその資格の更新登録を希望する場合、本協会が認める講習会または研修会を受講し、適格と認定され、かつ本協会が定めた登録料を支払わなければならない。
- (2) 本協会は、資格更新と認定された公認審判インストラクターに対して、公認審判インストラクター登録証を発行する。

第 51 条【登録料】

1. 公認審判インストラクターは、本協会が定める登録料を納付しなければならない。
2. 本協会への登録料は、毎年 1 年分を納付するものとする。
3. 本協会登録料の金額は、別表に定める額とする。
4. 資格を更新する公認審判インストラクターの年齢は、更新手続きを行う年度開始日の前日（3 月 31 日現在）の年齢とする。

第 52 条【届出】

公認審判インストラクターは、届出済の公認審判インストラクター情報に変更が生じた場合、可及的速やかに所定の手続きにより変更しなければならない。

第 53 条【所属の変更】

公認審判インストラクターは、主たる活動の場を所属している都道府県協会から他の都道府県協会に変更する場合、変更を希望する都道府県協会に確認した上で「所属協会変更届」を申請し、変更前の都道府県協会と変更後の都道府県協会の承認を得なければならない。

第 54 条【休止・再開】

公認審判インストラクターは、長期で海外勤務をするために日本で活動ができない、もしくは、長期の病気、怪我の治療又は妊娠などのために活動ができないなど、やむを得ない理由がある場合に限り休止を申請することができる。

なお、休止した公認審判インストラクターが活動を再開する場合には、当該公認審判インストラクターは、休止前に所属していた都道府県協会に復活を申請し、所定の講習会、研修会等に出席する必要がある。復活の際に所属する都道府県協会が変更となる場合、第 53 条に従い「所属協会変更届」も提出すること。

第 14 節 公認審判インストラクターの義務

第 55 条【遵守義務】

1. 公認審判インストラクターは、次の事項を遵守しなければならない。
 - (1) 法令および本協会の各種規程・規則を遵守すること。
 - (2) 競技規則等を正しく理解し、常に公平公正な立場で、日本のハンドボール発展に貢献すること。
 - (3) 所定の講習会、研修会等に参加し、技能の向上に努めるとともに、公認審判インストラクターとしての自覚と責任をもって行動すること。
 - (4) 試合に関して不正行為又は操作を疑われることのないよう自らを厳しく律すること。
 - (5) 差別および暴力の根絶に向けた努力を継続すること。
 - (6) 暴力団など反社会的勢力とは一切関係をもたないこと。
 - (7) 暴力団など反社会的勢力との取引およびあらゆる不当要求を拒否すること。
2. 公認審判インストラクターは、審判活動について、次の事項を遵守しなければならない。
 - (1) 実施した講習会、研修会にかかる報告書を、可及的速やかに派遣協会の審判委員会に送付すること。
 - (2) 評価を行った公認審判員にかかる審判アセスメント報告書（評価票）を、派遣協会の審判委員会に送付すること。

第15節 公認審判インストラクターの育成

第56条【公認審判インストラクター講習会】

1. 本協会は、公認審判インストラクターの指導技術向上のため、S級、A級、B級審判インストラクターおよびビーチハンドボールS級、A級審判インストラクター講習会を年1回以上開催する。
2. ブロック協会は、管轄する公認審判インストラクターの指導技術向上のため、C級審判インストラクター講習会を年1回以上開催する。

第16節 公認審判インストラクターの資格適格性の再審査および指導

第57条【公認審判インストラクターの資格適格性の再審査および指導】

1. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、次の各号に該当する場合、公認審判インストラクターの資格適格性に対する再審査を行うことができる。
 - (1) 第44条に規定する技能を有すると認められない場合。
 - (2) 第55条に違反した場合。
 - (3) 第59条に定める機関において懲罰が科せられた場合。
 - (4) その他、公認審判インストラクターの資格適格性に疑義が生じた場合。
2. 本協会、該当するブロック協会又は都道府県協会は、公認審判インストラクターの資格適格性に対する再審査の結果、必要があると判断した場合、公認審判インストラクターへ次の指導を行うことができる。
 - (1) 注意（口頭による注意）。
 - (2) 嚴重注意（文書による注意）。
 - (3) 公認審判インストラクター資格の停止（一定期間の公認審判インストラクター資格の停止）。
 - (4) 公認審判インストラクター資格の降級（下位の公認審判インストラクター資格への変更）。
 - (5) 公認審判インストラクター資格の失効（失効後にインドアハンドボールC級審判インストラクター又はビーチハンドボールB級審判インストラクターに再度申請することは妨げられない）。
 - (6) 本項（1）から（5）の項目に代えて又は併せて、一定期間の社会奉仕活動への従事、書面等による反省文の提出その他必要な指導。

第17節 公認審判員、公認テクニカルオフィシャルおよび公認審判インストラクターの表彰並びに懲罰

第58条【表彰】

本協会は、審判およびテクニカルオフィシャル技術の向上等に著しく貢献のあった公認審判員、公認テクニカルオフィシャル並びに公認審判インストラクターを表彰する。

第59条【懲罰】

本規程および本協会の諸規程に違反があった公認審判員、公認テクニカルオフィシャル、公認審判インストラクターは、倫理委員会、コンプライアンス委員会にて、諮問、審議され、理事会にて処分される。

第18節 本規程の改廃

第60条【改廃】

本規程の改廃は、理事会の決議に基づきこれを行うものとする。

附則

本規程は、2023年9月1日より施行する。

ただし登録については、2023年4月1日より行うこととする。

本規程は、2025年10月1日より一部改正する。